

飼籠鳥目録

自二十七卷  
至二十卷

農務省  
圖書  
第一  
號  
共  
冊

大政官文庫			
和	一〇九六一	獅	函架冊
書	五		
門			

内閣文庫	
和	一〇九
函架冊	五
	九

内閣文庫	
番號	和 10961
冊數	5 ( 5 )
函號	197 129



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

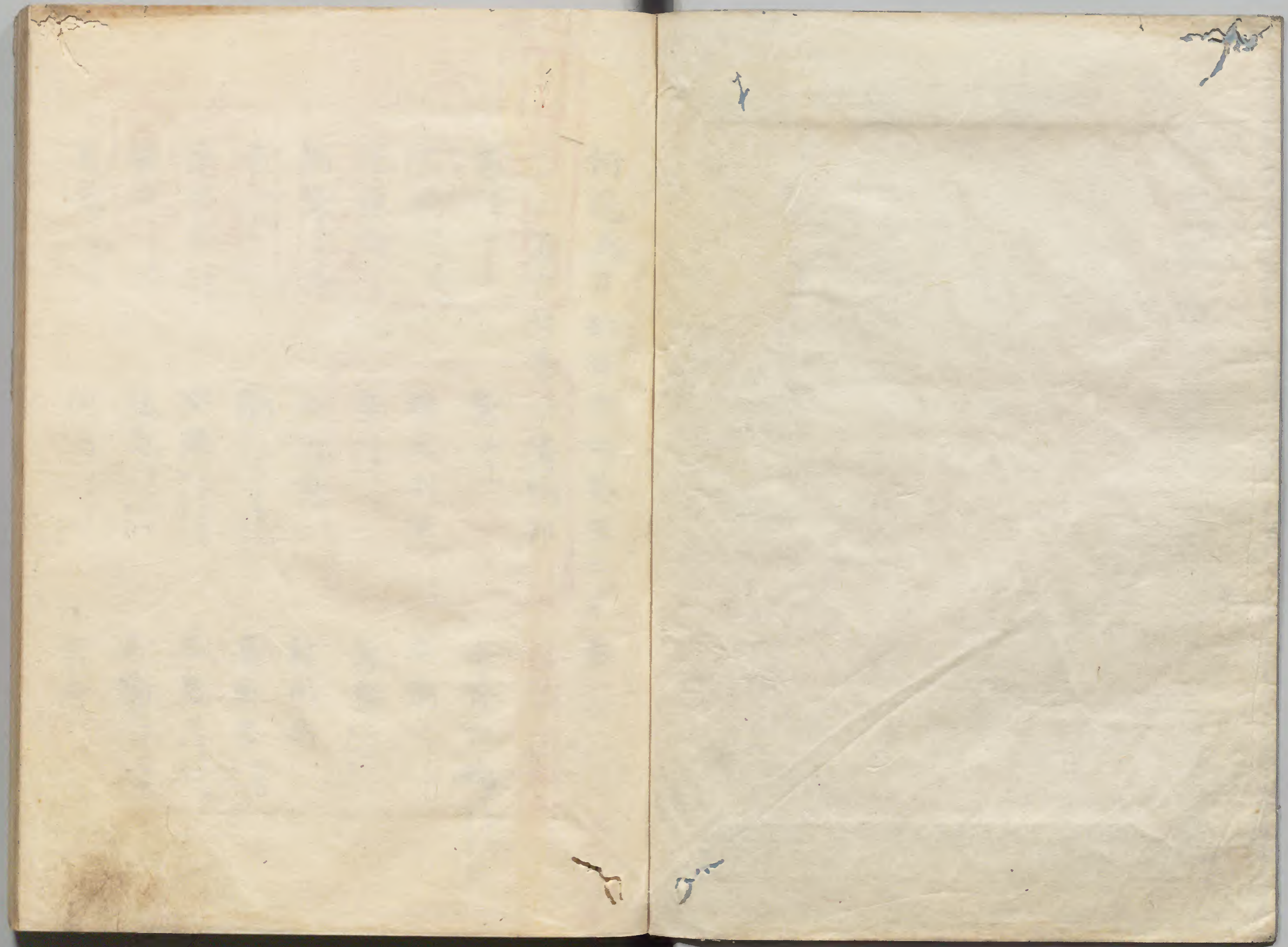
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TMI: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

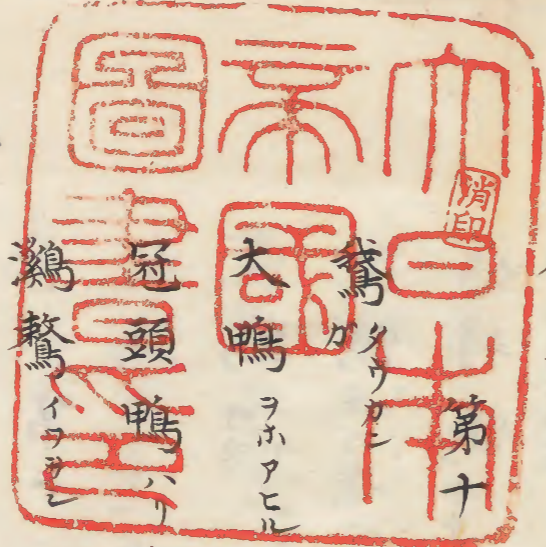


鳥目録

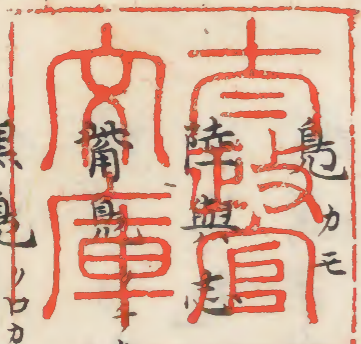
鳥目録

飼籠鳥目録自十七卷至二十卷

五九三番



第十七卷  
飼籠鳥目録  
鷺 鷺頭 鷺鴨  
鷺鷥 鷺鴨  
鷺鷥 鷺鴨  
鷺鷥 鷺鴨



鳥目録  
飼籠鳥目録  
鷺鷥 鷺鴨  
鷺鷥 鷺鴨  
鷺鷥 鷺鴨



鷺鷥部  
鷺鷥部  
鷺鷥部  
鷺鷥部  
鷺鷥部  
鷺鷥部

明治十三年購求

黑背白鷺

立鷺

鷺鷥

韓明鳥

真與志

巴鷺

烏鷺

鷺廣

鷺 鷺頭

赤頭

冠鷺

問鳥

金黒 キンクロ

文鴨 ヲキハシロ

柿羽白 カキハシロ

點羽白 ホシハシロ  
ボツチハシロ

籠羽白 カコハシロ

鳩蘆 シマアジ

翡翠鳧 ヒスイカモ

沖鳧 ヲキカモ  
ヲキケニテウ

刀鴨 コカモ

鷓鴣 カイツブリ

鷓鴣 ナミクハリ

海雀 ウミスノ

第十八卷 鶴部

灰鶴 マナツル

赤頬 アラマナ

琉球鶴

白鶴 丹頂  
トウツル

白鶴 シロツル

袖鶴 ソテツル

玄鶴 マツマイツル

黒鶴 ナヘツル

紫鶴 ムラサキツル

姉羽鶴 ア子ハツル

鶴 コサ  
シリック

烏鶴 ナヘコウ

陽鳥 クロトリ

白鶴子 タイサキ

白鷺 サギ  
ミノサギ

小鷺 コサギ  
一杯鷺

朱鷺 猩ミサギ  
アカサギ

褐鷺 アラサギ  
ミトサギ

百白

青鶴 ミツゴイ  
キヨロサギ

水鷗 グイサギ

山家五位 ホシゴイ

姫五位 ヒメゴイ  
ヨシゴイ

脊黒五位 セグロゴイ

漫畫 ヘラサギ

鷓鴣 トキ

鍋鷓 ナベトキ  
ナベカフリ

第十九卷 鷹部

鷹 タカ

制羅

圖式

聞見常談

日本鷹相説

滿齊

鴨

鴝鷹

醜鷹

養鷹

放鷹

相鷹歌

鷹賦

第二十卷 隼鵠部

隼 ハヤフサ

鷗 ノスリ

鵠 エツサイ

逸羽 宝形

白兔鷹 ユキシロ

島鷹 オホトビ

羗鷲 ハチクマ

鷗鷗 コノハヅク

夜鷹 ヌエツク  
ヨタカ

鷗

鷗 コノリ  
ハイタカ雄

麻久曾鷹 マクソウトウ

海東鳥 サシバ

魚鷹 ミサコ

鷗 クマタカ

虎鷹 トヌシ

鷗 フクロウ

慈鳥 カラス  
ハシボリ

鷗 ハイタカ  
コノリ雄

鷗 ノセ

雀鷗 ツミ

白鷗 ヲシロ

雀鷹 トビトミ

鷗 クロリ

鷗鷗 ミヅク

島鷗 シマク

烏鷗 ハシフトカラス

猗骨執育 チヨ  
エトヒリカ

全部二十卷

異鳥 四十一種  
飼法 六十六條  
鳥数 四百十四種

飼籠鳥鶯鴨部目錄第十七卷

藤成裕曰鶯や鴨や皆陰の屬して水に棲ぎ  
陸より上り汚をまじひ潔きを好む其性温ふして寒  
をいとまじ暑をまじむいざ早晩性を擅る池沼に  
浮遊して人の珍觀の供と是故に鶯ハ晋の  
右軍が為る事跡を廣き傳へ鴨を宋の子瞻が  
為る義名を騷人の示す形容炎ふして嘴大に  
尾短く足低く是乃水禽の天質全具し鳴て其  
義音を記す性陰るれなり

鶯経禽

大鴨ラアヒル

冠頭鴨クニトウ

鷓鴣本目

鳧経詩

陸與志

鶯カモ

黑鳧クロカモ

金黑キンクロ

點羽白ホシハシロ

鶯禮曲

諳厄利亞イギリス

鶯禮周

白鶯鶯

鶯鳥篇五

赤頭カカシ

冠鳧揚州府志

間鳧アイカモ

文鴨金子棟

籠羽白カゴハシロ

黑鶯白鴨雷公藥性解

立鴨クニアヒル

鶯鶯注古今

韓明鳥嶺表異

真與志

巴鳧トモヘ

烏鶯爾雅釋鳥

鶯カモ

柿羽白カキハシロ

島蘆シマアジ

翡翠鳧ヒスイカモ

鶯正字通

沖鳧ウキカモ

鶯揚子方言

乃鴨本草綱目

海雀

飼籠鳥鶯鴨部目錄終

飼籠鳥卷之十七

鶯鴨部 三十種

鶯

絲禽

一名右軍

南寧府志

長頸

事林廣記

義愛

異事物名

義禽

異事物名

草鴨

南寧府志

舒雁

本草綱目

家雁

同上

鰓

異事物名

羽衣郎

法名

兀地奴

通雅

家居有

本草

羽衣道士

異事物名

和名方ホカリ タウガニ

和産園りる日本紀雄略天皇の時唐土より来りし

載せり今人家に産る乃チ和品と有りて形状少異之

近來又希々唐船載来り形色少々不同は飼鳥家

焔磨顔エニマツラと名付る上品にて近時ハ絶て見ざる也



其卵を海船より求て雛を伏せしむれば乃彼の産の如くあり  
魚のそ形状雁に似く大に総身絶白く其類は黄肉  
冠有り背足も亦深黄なり又蒼色あり有り是れ蒼鶩  
と云本朝食鑑に云く状鴻雁の類を近世華より事有り  
唐雁と云此説非なり上古より来て互るを云ふ蘭山の  
本草後説は形家鴨アヒルの如く大なり脚短く水辺に頭  
長く喙の本は黄色の如く背脚も黄色なりと云烟法家  
鴨は相同く庭園に沼池を作く是れ其の卵を生じ雛  
を雛と云ふ

本草綱目曰時珍曰鶩鳴自呼江東謂之舒雁

似雁而舒遲也又曰江淮以南多畜之有蒼白  
二色及大而垂胡者並綠眼黃喙紅掌善鬪其  
夜鳴應更又云鶩伏卵則逆月謂向月取氣助  
卵也性能啖蛇及蚓制射工故養之能辟虫虺  
或言鶩性不食生虫者不然

師曠禽經曰脚近驛者能步

典籍便覽曰迫之俞前抑之俞仰故云頑而教

此説の如く人は迫イヨク俞スム前なり

八閩通志曰鶩能驚盜亦却蛇蓋其糞能殺蛇  
蜀人園池食鶩蛇即遠去

當塗縣志曰鶩爾雅曰舒雁有白蒼二色

鶩禮曲一名鴨說文鵠通雅舒鳧爾雅沉鳧瑯琊代醉白鳧事物異名

家鳧本草綱目家鴨同煩鴨事物異名鵠廣雅鵠瑯琊代醉

末匹通雅綠頭事物異名禿刺同上

綠衣郎事物異名青頭雞三國志青頭道士事物異名

番名 丑ニテ

和名 アヒル アヒロ 趾ヒロト云意也

諸州昔々人家畜純白なる眼尻一色綠頭藥用

よ食之美あり是或カアヒルと云白也藥用佳之

蘭山本草譯說洛西嵯峨の大澤と稱池多く群る也

鳥ハ人家畜る鶩あり釋名の鴨古より誤くカと訓

也非あり乃チアヒルなり羽淡稗子と與ふ也又青菜を好む也

也大抵雞と同く諸あり春の彼存り秋の彼存りて

卵を生む綠頭の卵を今もに佳り流水の清淨の所にて

生る卵ハ土氣を且藥合ふ用也

本草綱目曰時珍曰鶩通作木鶩性質木而無

他心故庶人以為贄曲禮云庶人執匹匹雙鶩

也匹夫卑末故廣雅謂鴨為鵠禽經云鴨鳴

呶呶其名自呼鳧能高飛而鴨舒緩不能飛故

曰舒鳧弘景曰鶩即鴨有家鴨野鴨藏器曰尸

子云野鴨為鳧家鴨為鶩不能飛翔如庶人守  
耕稼而已保昇曰爾雅云野鳧鶩而本草鶩肪  
乃家鴨也宗奭曰據數說則鳧鶩皆鴨也王勃  
滕王閣序云落霞與孤鶩齊飛則鶩為野鴨明  
矣勃乃名儒必有所據時珍曰四家惟藏器為  
是陶以鳧鶩泥稱畝以鶩為野鴨韓引爾雅錯  
舒鳧為野鳧並誤矣今正之蓋鶩有舒鳧之名  
而鳧有野鶩之稱故王勃可以通用而其義自  
明案周禮庶人執鶩豈野鴨乎國風弋鳧與雁  
豈家鴨乎屈原離騷云寧與騏驎乎將與鷄鶩

爭食乎寧昂々若千里駒乎將沈々若水中之  
鳧乎此以鳧鶩封言則家也野也蓋自明矣又  
時珍曰案格物論云鴨雄者綠頭支翅雌者黃  
斑色但有純黑純白者又有白而烏骨者藥食  
更佳鴨皆雄瘖雌鳴重陽后乃肥腊味美清明  
后生卵則內陷不滿伏卵聞礮磨之聲則皸而  
不成無雌抱伏則以牛屎糞而出之此皆物理  
之不可曉者也琉球の醫師喜屋武筑登之福州の琉球  
館ニ行て醫術を學ぶ所筑登之鴨を伏して雛を出せし法を  
得て來り薩州の徳津堂殿の命に依り鴨卵を三百箇を

集く蒸器の中に蒸く火氣を以て蒸く 雛を以て蒸  
州より此法を此筑登るよりうる然れども其卵多く腐れ  
して雛を以て蒸く少くして何の益也 筑登之云く唐の  
魚肆は皆雛鴨の多く蒸く子鴨は皆蒸器を以て一度に数  
百を出て一も貴く皆焼く雛と云く未だ其法を得ず故  
其貴く蒸くは其法は卵を火上にて少く焙りて其卵のよ  
汗を少く出た此汗を拭き去り馬糞の内は蒸く幾重も重  
火氣を以て常々後多狭小くして蒸く時自ら雛と云く  
時ハ今物自ら食フ

揚州府志曰鵝鴨伏以牛矢姬而出焉此説の如く

牛に糞を以て糞を為す時乃馬糞の如く

嶺南雜記曰雄鴨以南雄府得名鴨嫩而肥醃  
而以麻油漬之日久肉紅味鮮廣城甚貴之  
物類相感志曰鴨蛋以硃砂畫花及寫子候乾  
以頭髮灰汁洗之則黃直透肉

清人云く雲南麗水其處の人家は皆鴨を多く飼ひて  
日く其水中に入ると其鴨は其糞を以て糞の中は金を  
淘りて

黑背白鴨 雷公藥 性解 一名鳳 鉛山 縣志

和名ハニク

先年琉球より薩州へ来たる其形状全く常の鴨ふして純  
白其嘴と爪と真黒なり

雷公藥性解曰黒嘴白鴨と云は是れなり又純黒ふして  
嘴足も黄なるものあり是れ奇品なり

本草綱目曰時珍引格物論曰又有白而烏骨  
者藥用更佳是白毛ふして嘴と爪の黒なり

杭州府志曰亦有純白純黒者

鉛山縣志曰鴨有浙來者白身而黒骨名曰鳳  
今失種是れ黒骨と云は嘴爪の黒と云は此又一名鳳  
と云は是れなり

當塗縣志曰鴨爾雅曰舒鳧廣雅作鴉匹間者  
白毛黒肉者已上以種三種俱家畜蒼白の二種  
此黒骨共の三種なり彼土より此三種より凡に其種あり

大鴨ヲ、ニ  
見へたり

元來阿蘭陀人持来る其形状右同し其毛色常の鴨の如  
只大なるをいふ異つと云ふもの相違ありといふ

諸厄利亞イ、キ、リ、ス  
一名大鴨名

元來諸厄利亞の種ありと云常の鴨と冠頭鴨カハシトウと交合して  
雛をばたつものあり其形状冠頭鴨より似く亦鴨より

河原はそれいおあゝおらるる是乃鴨中の一品なり

立鴨 タチアヒ 一名ツタ井エントー番 俗に其名を用ひる 三 大に信るなり

阿蘭陀の種ありと云未だ其信を云ふは次を大サ鴨より大  
小にして身は長なり形色は相同して只胸を張て歩むの鶯  
の歩行ある形のみ

冠頭鴨 クハシトウ 一名バリケン 蓋一番 名なるなり

本来番産あり其形状鴨より同して甚く大なる毛色も  
亦似く只頭上より肉冠有り鶏冠に似て甚く見苦しき象也  
其毛色も多しハ黒白相雜るものあり

鶯 鶯 一名野鴨 本草綱目 野鶯 遵化州志

和名カモアヒル ア井 飼鳥

或は野鳥を飼ふる久して遂に變りて野鶯と云ふと云此流  
未だ試て然る事云は次其形状鴨にして鴨より小く  
鳧小くは鳧より次は能く高飛して乃ち甚く行する  
左和本草云く一種鳧鶯有り鳧に似く鴨より能く飛又能く  
卵を生して變るなり又本朝食鑑云く一種鴨鶯有り状  
全く鴨に似く其態は全く鶯に似て其飛る鶯に似て捷  
なり家畜は是れ畜てカモアヒルと号せ能く卵を産む雛も卵を  
よりかゝ是れも亦く雛に伏育せしむ所ありて其成長を卵  
をあり其肉を食むるに鴨類の第一なり冬月亦用ひて鶯

物は是と偽々野鴨と云々彌南と銘々辨明と云々  
遵化州志曰野鷺背青而有文舉翅舒而不疾  
此説と見ゆ魚一野鷺と似く文有り翅舒て早く飛ぶ可なり  
と云と記す是れ乃チカモトにあり此鷺と對して家鷺家鴨  
の名有り野鴨と云て鷺有り野鷺ハカモトあり故ニ鷺鷺の字  
乃二種を連て稱と相似たり

尸子曰野鴨為鳧家鴨為鷺此説皆非なり野鴨ハ鳧  
より次乃鷺なり家鴨ハ鷺より次乃鴨なり其混雜を  
取差皆誤也千古に傳ふ予り此説を妄明として其誤を傳ふ  
るをこれぬ又池塘に此種を養ひ卵を賣る者有り三年少くても

大に富む鷄鴨より甚く勝れり云々

鴛鴦古今注一名匹鳥上同黃鴨本草綱目文禽禮儀詳註珍禽事物異名

昂魚兒上同節木鳥雅通 婆羅伽鄰提涅槃經

番名

和名ヲシトリ ヲシカモ

享保十一年八月十九日台命を以て南京の鑿師  
周岐来に此鳥を示す岐来云々即鴛鴦也一名黃鴨  
匹鳥共々本草綱目より云々此説は後付古人の考考  
と為るは誤なり古歌にも亦此の鳥や上毛の名稱と拂  
ふん供は後のかゝる諸聲になくとられ乃チ鴛鴦の哉

の叶あり此類の古語猶多し後編より出づり渚か其の池澤  
の間浮遊する形状赤頸に似て少く小なり首より長毛  
有り後より眼色に色見<sup>トモカモ</sup>の似たるも白く背は黄緑色なり  
文彩相間し兩翼は紫色の處有りて見事なり背足黄なり  
雌は美毛なり鳥の雌は同一箇月に樹上の洞穴の中より卵を  
生じ卵を育く母雞は伏し居り付に雛を育く年を待て漸  
く美毛を生じて美色となりたり和鳥の中は美なるもの此を  
より外に何れものか庭中に水を貯て養ひたり子飼は  
諸の鳥の如く時々蟲類を喰ひたり美色となりて光澤を  
増せ久しく飼ふ時、卵を産む雛鴨の類の如し

本草綱目曰藏器曰人家宜畜之形小如鴨毛  
有五采首有纓尾有毛如舩舵形此説をくフニトリ  
あり首に纓有り尾は舩舵形の物なり所謂想羽なり是れ  
鴛鴦なるものと云ふは誤りて是は溪鷺と云ふは實に誤なり

又時珍曰鴛鴦終日並游有宛在水中央之意  
也此説是れラニなるもの明なり

古今注曰鴛鴦雄雌不相離人獲其一則一相  
思而死故謂之匹鳥予嘗て少く東都の某候の庭  
池の中に雌雄を畜ふ或時狗の爲るに雌を食ふは雄獨り  
浮遊を數日おいて一雌飛来る是れと云ふ相親む三十餘日



して其雄背を咬む再々して其雌忍て飛立て去る  
天に昇りて去るその後再び来ると云ふは是を以て見れば古人  
の説説のそと鴛鴦なるの疑ひは薩州の西の小池あり方  
圓數百面ふして水清故に鏡池と云古より一確は是或  
鏡池の二ツと云予六月廿六日とて此處より一の鴛鴦宛  
こして水の中より昔に龍山公の詠詠は薩摩の鏡池  
れ一ツかこが客を互と見せんと詠は此鴛鴦のゆあり  
幾百年にして今も此池に在るものと云ふゆは是等の説或  
以て見れば名鳥なるの疑ひを

雙槐歲抄曰漁人見鴛鴦交飛獲其雄烹之雌

戀、飛鳴竟投沸湯中而死漁人悲其意為奇  
羹不食余稱之曰烈鴛此等の説も鴛鴦に似たり  
誰か奇を傳ふを古今注に相思而死と云ふ是あり  
玉篇曰匹鳥雄曰鴛雌曰鴦此説を以て名命する  
時烈鴛と稱と魚  
本草綱目曰時珍曰鴛鴦鳥類也南方湖溪中  
有之接于土穴中大如小鴨其質杏黄色有文  
采紅頭翠鬣黑翅黑尾紅掌頭有白長毛壑之  
至尾交頸而卧其交不再

陽春縣志曰鴛鴦水鳥紅頭翅尾黑頭有白毛

質杏黄色具文采一名匹鳥止則偶飛則隻  
案多に只雌雄共し浮遊して群集を

禮儀詳註曰鴛鴦曰文禽又鷓雉も此名なり

杜甫花鴨詩曰花鴨無泥滓塔前每緩行此鴨

も鴛鴦を指して云あり

鷓鷯綱本草一名溪鴨異物志谿鴝文説

紫鴛鴦綱本草

和名イワラシ

諸州共し山間溪水の中に雌雄相遊るなり其形状全く

鴛鴦に似て背上の色緑紫なり鴛鴦より尤も見ゆあり

三四月に樹穴の中に巢を為さる鴛鴦も同し世人稀し是

戎俗に鴛鴦より貴し飼法も亦鴛鴦に相回し

本草綱目曰時珍曰杜臺卿賦云鷓鷯尋邪而

狐心狐

逐害此鳥專食短狐乃溪中勅逐害物者其遊

于溪也左雄右雌群伍不乱似有式度者故説

文又作谿鴝其形大于鴛鴦而色多紫亦好並

遊故謂之紫鴛鴦也此説大于鴛鴦と云時ハ岩ヲシ戎

鴛鴦小し一ヲシを鷓鷯と一ト此説は符合と云れとも

岩ヲシ七ヲシ七一様なり故に相混して後世お分りし

鴛鴦一名鷓鷯と云り付ハ其義を一岩ヲシハ乃チ鴛鴦の

一種として云う又長崎より高峯及舜水の字も亦  
ツコを見く鴛鴦と雖く相似く非ずと云はれし同く諸家  
益々疑くツコハ鷓鴣多し鴛鴦ハ岩ツコ多しと云はれし地  
もそのツコハ混雜して鴛鴦と云ふは予嘗て明朝の古画  
を見たり鴛鴦と云ふは亦ツコハ岩ツコに似たり乃鷓鴣鳥  
と相似たり是等の相を考るに彼の地ハツコ多し希く是正しく知  
たるふを記す諸説紛々今考へて古名鴛鴦ハ一  
其傳を失て宋朝のはり鷓鴣の稱起るそ實ハ岩ツコ多  
ツコを鷓鴣に當るるなり  
説文曰鷓鴣水鳥也先有五色

建州圖經曰溪游雄者在雌者右皆有式度

白鴛鴦 一名ニロヲコ

諸州共々希く出たり其形状亦同して其小なり總名雪の

韓明鳥 嶺表録異 一名

和名

和産阿のりそり 嶺南ハ此鳥阿のりと云故ハ此鳥録して後人  
の考へ備ふのこ

嶺表録異曰韓明鳥者乃鳧鷖之類此鳥每雙  
飛泛溪浦水禽中鷓鴣鴛鴦鷓鴣嶺北皆有之  
惟韓明鳥未之見也案于寶搜神記云大夫韓

韓下恐脱  
明字乎

原註 一其妻美采康王奪之明怨王因之明遂自  
殺妻乃陰腐其衣王與之登臺自投臺下左右  
捉衣衣不勝手遺書于帶曰願以尸還韓氏而  
合葬王怒命埋之二塚相望經夜忽見有梓木  
生二塚之上根交于下枝連其上又有鳥如鴛  
鴦恒棲其樹朝暮悲鳴南人謂此禽即韓明夫  
婦之精魂故以韓氏名之

鳥 經詩 一名鵲音施 晨鳥上同 沉鳥上同 水鳥行厨集

水鴨廣東新語 蜺鴨上同 火鄉採蘭雜志 匹居事物異名 眠沙鳥鷺 鷺名物法言

番右イニデヘッテ阿蘭陀

和名 シキツトリ古 カモ マカモ

漢語抄ノ鳥鷺訓毛加此說非なり 鳥ハカモ云れども鷺ハ  
鷺カモ 二物の連名に加毛と訓るハ全く誤りなり 又本朝食鑑

ニ鴨の字を用るハ大ニ誤り 鴨ハアヒルなり 前ノ詳よカモ

葉集ノシキツトリと云仲津の名と云意あり云々ハ今ノ

鳥なるや左の鷺なるや 詳ニ云々ハ 上古鳥の名をカモと云

ハカモモ云々カモモと云々佳なり

諸洲共ニある所を 秋葉を得る付来る水面ニ浮遊ス暮  
ヨハ更に水と好中樹下の陰ニ聚リ休ム其時水と畏テ水  
入るを 寒暑相及るハ其性温熟なる故なり 凡鳥の類

皆云う其形状鴨鵝より小く其首も似たり首蒼く  
是故に蒼首アツクヒの名有り雌は其首より小く一と只斑点有りて絶く  
文彩美色あり其雄と異なり其雛山中にて成長を南部  
の山澤に雛を為す所ありと云 蝦夷の地方に皆雛を生じ  
至て冷まらるる處にあつたれば雛を為さるるも其羽は禿  
を水に浸して其羽又折る小鳥を與ふも其羽は禿蟲の  
やりの羽の如くあり小鳥も及ぶ

考工記曰鳧入水不溺

本草綱目曰或云食用綠頭者為上此説と見れば  
此の工も綠頭を上品と云ふと見れば此の工も此他

何れを云ふ

戰國策曰補青首

遵化府志曰鳧浮也善浮虛也

臺灣府志曰鳧水鴨也

淮南府志曰野鴨俗名也鳧鶩鶩鶩鴨鳩鷓鴣

溷稱之此野鴨鶩非也乃野産の鳧と云りあり

鵝玉 一名白鵝同上

和名尾永鴨本朝食鑑

諸公共云う日州隅の地方にも多しと云其形状相  
類しと云し小首より背に連る茶色に赤色有り咽あり

腹より白く尾の中に又長く尾の背足淡黄色なり本朝  
食鑑より真鴨と次ぐ物尾亦鴨なり頭頸淡紫色眼  
邊より腹より白色背の灰色に碧を帯ふ黒毛の脇より淡赤白  
條有り背黒しと西遊青白尾長き者二三寸許脚掌俱  
に黒し其味亦佳なりと云此説あり第一に緑頭あり第  
二に此尾長あり藥用は緑頭のみなり

玉篇曰鴈鳥似鴨而小背有文今江東亦呼白  
鴈案之に緑頭は此の腹下白く故に白と云る魚

本草綱目曰尾尖者次之此説是れなり尾長は緑  
頭の味は次ぐなり

真與志 一名葦鴨 胡麻作

北海より多し又西よりなり其形状尾長く似て胸の毛色  
胡麻の色なり本朝食鑑より葦鴨なり頭背深灰色  
腹は白に翅間に青羽を交白脚は黄赤其味稍好し  
陸與志

北方に多し其形状真與志に似く胸は脊の斑なり  
首より背に白く美毛なり其味真與志より好し希に畜  
て弄観たり人なり胡麻緑頭と同し

赤頭 一名ヒカモ

諸州共に秋来る一群の中に希に是れなり其形状

真興志は相同し首より肩より赤色腹白一本朝食鑑  
よく赤頭あり俗は赤鳥と云頭赤額は赤の條より背より  
碧色より赤と背より兩脇白く腰より背脊碧に脚蒼其  
味稍好し

巴鳥 トモエ 一名蘆鳥 ヨシカモ 同名有之

諸鳥共におるが形状赤頭より尖り小に頬に巴の形より背より  
翼毛よりて甚く美あり畜て眼玩を魚し凡鳥中の例より中  
よりのあり飼育家より希に見るものなり案るに本朝食鑑よく  
蘆鴨より頭灰色に赤と背より眼より小黒條小白條より頂  
より前より胸間より黒腹灰白に背碧に白條赤條黒條  
あり翅より音羽を交り背脚ともに黒し其味最佳あり凡鳥の  
類より飼て眼玩を魚しよりのあり故に往々飼育家より飼法  
諸の鳥にお同し

嘴鳥 クチカモ 一名口廣鳥 クチヒロ 口鴨 本朝食鑑 車鴨 上同

諸鳥共より希におるものなり多し山中の溪澤より来るが形  
状冠鳥に相似て丸も見ゆあり其嘴薄く平く先より圓く  
色黒し足亦く本朝食鑑よく口鴨より頭頭より黒く頸より  
白環紋より背より尾より白く一條黒色翅に緑羽より赤羽  
又相交り兩脇赤く腰白く嘴黒脚赤く能くおぼしめて數日  
群を為し轉回を故に車鴨と云す味羽白赤同し

世人諸々花鴨と云ふもの其れ有り凡ッ鳧の類の奇品  
と云ふ一飼法諸の鳧は相同

冠鳧 揚州府志 一名

和名ス、カモ 花鴨 柳川方言

九州柳川の沖にありあり他あり絶てり先年隅州の海  
上に飛ぶと云ふは鴨ありそ大サ真鴨に似て胸蒲色  
白黒相雜て口鴨の如く背の上にありて鼻の上に赤冠あり  
高し珍客容貌あり蘭山本草譯説云く海中一種冠鳧  
是とナカモと云鳧の中に一種冠毛ありのあり灰色と青  
色の斑り毛長くあくとぬりあり又正字通より冠作

冠然の時ハカモのものとあり冠ハ鴨の類多く集り盛るる車波  
寂と云カモ、多く集る故あり是一説ハ鴨も未穩密に蘭  
山に於て肉冠をたに非も毛冠と云に似たり一も有る所ハ未タ  
花鴨の肉冠ありて冠鳧は當るものと云ふや故あり予嘗て  
柳川を過ると工人の問尋ると此鳧國法ありて他あり此  
を禁む又是或捕る者ハ國公より命して秋月に捕る能  
飼ハ附いて飼するを東都一然と甚く貴し是或飼ハ海に  
規蛤を研りて虫飼の上は蓋して飼ハ付あり又鰻魚を細  
刻と與ふも一又此所の規蛤及鰻魚よりこれ絶て  
食する者故に地州の海に於ると得むと云へたる此保



海蜆蛤を産するも亦他州と頗る異なり此等の俗説を  
考ふるに畏く此を採らざるに似たり然るに夏月、産す  
籠に入され、死す事、飼難き物なり

本草綱目曰時珍曰海中一種冠鳧頭上有冠  
乃石首魚所化也並宜冬月取之此説も亦奇之  
愈く石首魚イニモクの化とあるは是れも亦此所の海斗の想に  
柳川の海斗限りて居る付、石首魚の化と可の如し

方言恐  
方言之誤

華夷鳥獸考曰冠鳧言方曰齊宋之間凡物盛  
多謂之冠注云今江東有小鳧其多無數俗謂  
冠鳧陸龜蒙集有禽暴一篇此説を見れば其多群

冠鳧を謂て冠鳧と云ふを見たり志うは俗説信難  
揚州府志曰鳧一種冠鳧頭上有冠此説海中に  
一種を分て之又頭上に冠有り云

典籍便覽曰鶴頂鳥形大如鴨毛黑色頸背亦  
長其腦蓋骨厚寸餘外紅色裏如黃蠟

物理小識曰鶴頂乃海中鶴魚之首摩印其兩  
頰之紅子其頂骨也

華夷珍玩考曰鶴頂紅出南蕃大海中有魚頂  
中鮫紅如血名曰鶴魚故以為帶號曰鶴頂紅  
今用龜筒夾鶴魚鮫為梳名曰鶴頂梳佐近在

都御史羅通官舍見其鶴頂紅帶云是海外真  
鶴頂剪碎紅夾打成帶上有細波綻無紋者即  
偽物也又見真鶴頂但兩頰紅頂不紅者三个  
可作一帶是等の諸説を見れば海中の魚首の骨あり  
此魚乃石首魚と云ふなり相あり予も亦く産みたる鶴頂紅  
と見ると解の片石にて両端赤く中間の骨あり見ると  
相ありと後にも亦く再々見ると實に眞の鮫骨なり冠鳧の  
頭中にも如此の骨あり是の故に石首魚の化と祈ると云故  
に此の諸説を引く後考の便也

鳥鵲兩雅釋鳥一名鶴鳥同上 鶴鵲同上

和名見吉鳧大坂

何國より出づや未だ其出所を詳に辨せざ大坂の弄鳥家  
より其大サ緑頭アツクの似く黑白相雜る腹白面の頬白く丸顔  
の中にて此等を最上として觀玩を魚の何法冠鳧と同一  
夏月産みたる茲に大く炎暑を過ぐる處に多く暑中を通  
難しと云

黒鳧クロカモ

爾雅釋鳥曰鵲鳥鵲鵲註水鳥也似鵲而短頸  
腹翅紫白背上綠色江東呼鳥鵲此説を以てり  
諸州共に荒海にあり其大サ真鴨マカモより總身深黒あり其

味も亦く佳きなり此種冠鳥と同く大海の鳥にして田沼池

水と見を志すものなり故に是成河の鳥と云ふなり

間鳥 <sup>アヒカモ</sup> 一名 <sup>アヒサ</sup> 間早 <sup>戸江</sup>

諸の共くあり江戸の秋早く来る故に早鳥と称し

愛ふ是れ之此種と見たる元来鳥の種に於ては白鷗の種

より進み其形鵞頭に似る嘴の遠く齒は平なり家鴨の

と云ふは家鴨嘴と云鳥嘴より進み是成野鳥の種と

云魚の次皆海中の種なり又生魚と云ふ生魚を以て

種も二十四日の活きの長くは活きの長

一種嘴の黒なり

一種嘴の赤なり

一種小はく嘴の黒なり

一種大はく嘴の赤なり

一種小鳥より尤も小なるあり

一種小鳥より尤も大なるあり

已上皆海産して生魚と云ふ皆海鳥なり此種類海中

に於て多く見ゆものなり一ツ一ツは得て辨明せしむる人

の能くするなる物を世に裁きしるの一人を名號も混雜して

亦一ツ一ツ故に畧して載るなり此類皆後編に辨明せ

且又圖中に於て細覧を爲し

鶯廣

諸所共に出る其大サ真鴨と小鳥の間小サ身圓ミツ眉  
白腹も亦小背深黒鶯ハ淺藍色足ハ黒首上ニ練雀

金黒

諸州より其形状鶯廣鴨と同一ニ首上ニ練雀あるの  
太和本草より云く真鳥より小に頭ニ勝つる頭ニ有傍の黒  
光の毛背上黒一翅の裏白一翅の光ハ白咽より腹白一腹  
より細文アリ尾短く鶯ハ短く雁の如く足淺黒水より多しと云  
此説の如く往々に人は或は飼ふ又養鳥家も亦つり飼法  
鳥の類は同一是等の類々皆鳥類を作つて鳥類の内ニ

小池を作り清水を貯り飼ふ時を歳久しして死をみる一程野鳥  
亦多し集るあり今是を集る人あり

或人云く光年彦州荒井の江上より終る白日空中に雷鳴有  
人其作を見れば鳥雁の類空中より落し數を皆首翅を折り  
飛来り其中金黒羽白羽も多しと云

平仲談苑曰魏州朱陽鎮一夕鳥雁之聲滿空  
其鳴甚悲建且鳥雁宛于野中無數或折頭或  
折翅或全無所傷而血汚其喙村民載之入市  
市人不敢買蓋此鎮未嘗有此物怪之也此説純  
符合と空中に終る雷火の撃つて羽翼を折り或は血を吐く

文鴨子金樓一名海鴨上同

和名沖羽白 間羽白ハシロ

北海より来る他州にも多しを来りて其形状を羽白に似く  
少く小く背上白く飛ぶ時黒白相映して常の鳥の類と異り  
其体毛は真鳧に相類を来りて細く人よりもと劣り

金樓子曰海鴨大如常鴨斑白文亦謂之文鴨

此説を以て海鴨海に栖む鳥の總名あり此文鴨の名号は都て

柿羽白カキハシロ

諸州にも羽白に相似く腹は柿色の所あり

點羽白ホシハシロ 一名ボウチハシロ

諸州にも羽白に似く大に肩は白く總身黒く

腹白

籠羽白カゴハシロ

諸州にも羽白より大く小くして淡黒あり胸背より

柿色あり肩より首まで赤頭のみ

鳴シラ 蘆アシ

北海の地方は多く也秋早く来りて其形小鳧より  
腹は鵞の斑あり背は眞毛あり頭面の色は丁子茶あり凡  
小鳧の中細く居り物に是等あり又希く細く人よりも  
諸の鳥に同く只夏月を以て飼ひ難し

翡翠鳥 ヒスイカモ

諸州共々あり其大サ小鳥の如く羽色淺藍色にして翅の  
先は黒く如く輪なりて至り見ると目の色黄色の輪なり  
雁の如く小鳥の中の最上なり何法禱の鳥の如く常に何鳥  
として夏月に入りて甚くむつりたる如く夏中を過て又何鳥

沖鳥 ツキカモ 一名沖玄鳥 ツキケンテウ 奥州方言

奥州にあり其大サ小鳥の如く總身淺藍色なり秋捕り  
先は土鱗を帯へて稗に付りあり凡何鳥の中にて石も少  
て見ると最上の鳥なり何法禱の如く何鳥なり鳥中  
於て甚く何鳥なり

刀鴨 本網目 一名助 字彙 粒頭 太湖備考

和名ツカモ タカベ

諸州共々池沼の中に棲り其形状全く真鴨に似て甚く  
小なり首は光毛なりて見ると何鳥家にもあり何法禱  
少く又其何鳥も何鳥なり

梅誕生字彙曰助音刀鳥似鳥而小

本草綱目曰野鴨有與家鴨相似者有全別者  
其甚小者名刀鴨味最佳此説是也小鳥なり或は此小  
鳥を以て鴈鵠に當り説あり大に誤りなり鴈鵠は自ら一種  
下に詳しきあり大抵同類なり刀鴨は總く又文彩なり

て極く其腹多う鳥ありと云は説も亦小鳧の形状多う清人の周岐来も刀鴨と云又俗語水胡盧と云此説を相符合と本草に刀鴨と鴈鵠の釋名の中に入りに依り諸あるの誤を承るものと云る也

太湖備考曰鳧出太湖深秋方来集至冬而盛每屏飛而過其數千萬捕者以網取之俗呼野鴨種類不一最小者佳名粒頭肉香而骨脆

此説甚く明白なり彼の地も亦秋深して来り千萬此を湖の中に捕り土人業として網を捕ると云ふなり此等の説と云ふこれに彼湖迄の趣は日本と同様なり書籍を讀むる

人は是等の事に至りては空しく世を没せざる處に予如此の事を考て其地名を知時を暗に彼の地の趣を心中に徹して思ひ中に過りたり或は云く奥州南部の山中は夏月や鴈も野鴨多く住む鴈雁も亦希に江に捕へく是を見まは翼折し足折なるものあり北方の國に歸るものあり此等山中の溪流の間に棲り又秋分の比より共々四方に分れありと云

鴈正字 一名須羸兩 水鷺日用 油鴨本草綱目

鷺同 鷓鴣正字

和名ニホトリ古今集 カイツブリ關東 ツブリコ備后 シヨ美濃

チツテヤウツグケ州河ニホ上ニホ崎長イケツリ土イヨノ上

メウチニ遠ムクリテウ州武テツテウムツツテウ武州カハルルマ州上

メウナイ州信ヒヤウタニコ河カハキニ仙ニゴヘ州勢

和書に鳩の字をニホと云白石云くニホを湖と云湖中に栖る  
て此鳥を湖鳥と云古今集にその池にまゐるゆとりはこれなり

あく廣のゆとりふくよと云く此類よりニホの名あつたり其鳩

の字も俗字ふし水にふくの類とあてたり諸州共ニ池澤

の中に生じ四時共より其大サ刀鴨に似く都て野鴨

の雛に相似く足にありけりて忽水に出没を人と見く

路を聲を登く水より遠く水底を行く首をもち四子

月スミレ菰葉を巻く卵を生む雛より純く水におぼれ鳴く

是或捕り飼ふも未だ水底の小蝦を有り食ふ故に飼ひ

か本朝食塩をく鷓鴣鴨に似く小刀鴨より大なり

頭背翅尾蒼く赤と帯縹色に似たり類及領下頸前紫

に脚黄より紫斑有り腹白背黒に類紅掌好て浮遊

て水におぼれ或相對し相伴て旋回し其味臊し佳なり

本草綱目曰時珍曰鷓鴣刀零丁皆状其小也油

言其肥也藏器曰鷓鴣水鳥也太如鳩鴨脚連

尾不能陸行常在水中人至則沉或擊之便起  
其膏塗刀喙不鏽續英華詩云馬啣首蒼葉劍



鶮鷓鷯膏是也時珍曰南方湖溪多有之似野  
鴨而小蒼白文多脂味美冬月取之其類甚多  
正字通曰鶮鷓鷯蒼白文多脂脚連尾不能陸行  
一名水鷓鷯又名鶮鷓鷯俗作鶮鷓鷯案名に飲膳正要に水  
扎りり手圖を見たり鶮鷓鷯あり

鶮鷓鷯 揚氏方書 一名

和名ナミクバリ 西土

諸州昔々海江の間ニ栖す乃チ鶮鷓鷯の一種大なる物なり  
そ大サ鳩の如く形今々鶮鷓鷯に似く黒色に黄赤色或帯  
ぶ尾短く足赤く水の中を常ニ波に乘りて出没す之を  
見ると乃チ没す三四月より五月を移して卵を生じ風を  
手巢に浮移りたり小魚を食ふ故に飼ふるを忌むと云

揚雄方言曰野鳥其小而好水中者謂之鶮鷓鷯  
大者謂之鶮鷓鷯此説より大小分る魚

海雀 ウミスズメ 太和本草 一名カイツムリ 同名有之

南海の中に浮遊を乃チ海鳥にして鶮鷓鷯の一種なり其大サ鳩  
の如く背上鼠色なり波浪を分て海水に没して小魚を食ふ  
是或飼魚に法あり太和本草に云く海雀四國より多し  
鶮鷓鷯に似て異なり大サカ鴨の如く海鳥なり嘴尖て雀の  
如く頭及背淡黒色胃腹白く胃腹の四旁の毛黒白相

難り翼を身に比され其の小なり尾を足黒し其趾二つ  
に如れ水如り其肉脂多し不堪為饌具婦人の血の道の  
薬なりと云未<sup>レ</sup>知然否此説是れなり總て水中に棲む鳥の脂多  
し鴈及此鳥の脂尤も多し古より刀劍を引く時鏽を依  
此脂を三年磨し拭ふ則名劍にあらんと云り此説も亦  
本草より抄るるあり

續英華詩曰馬啣首蒼葉劍瑩鴈膏國朝詩  
別裁集曰日本雙刀歌曰鴈鵝之膏雙于將燈  
下拂拭生神光皆此膏と稱するあり

飼籠鳥卷之十七終

六月四日寫

飼籠鳥部目錄第十八卷

勝成裕曰鶴也鷺也山禽より水禽よりあり  
鶴の松頂より止り鷺の竹林より集り下りて田に啄み走  
て澤に吟ふ是れ乃ち濕禽也山禽より嘴短く尾長く  
脚長く雉の属是也水禽より嘴大し尾短く脚低く  
鳧の属是也濕禽は鶴鷺及鷺の類嘴尖り首  
長く脚高し是れ乃ち濕禽の形質自然と備り  
不曰して明白なり不問して自ら知るあり

灰鶴 續榆 縣志

赤頰 陸機 詩疏

琉球鶴

白鶴 永喜 記

白鶴 本草 綱目

袖鶴 ソテツル

玄鶴 古今 注

黒鶴 クロツル

紫鶴 ムラサキツル

姉羽鶴 アツハツル

鶴 經禽

烏鶴 別本草

陽鳥 本草 拾遺

白鶴子 本草 綱目

白鷺 陸機 詩疏

小鷺

朱鷺 經禽

褐鷺 深州 志

百白

青鶴 當塗 縣志

水鷗 清朝 俗名

山家五位

姫五位 ミコイ

脊黒五位

漫畫 鞍耕 録

鷓鴣 本草 拾遺

鍋鶉 ナベトリ

飼籠鳥鶴部目錄終

飼籠鳥卷之十八

鶴部 二十 七種

灰鶴 贛榆 縣志 一名寒鶴 肇慶 府志

和名夕ツ 古マナツル

古より單に鶴と云ふ灰鶴あり本朝食鑑にも真鶴と書る

方土の方物より此種を用ひ又食料にも是れあり

諸州共々其志をれも西より少く關之東より多く其

何國より秋彼岸の以て盛なる其形状如く大くして

首白く目赤く目遠く赤毛有り背は藍色脚高く色赤く

本朝食鑑に頂頸皆白く頰赤く背青く背後より胸腹悉く

黒く背より尾前まで灰色より青と背より尾白翎羽等  
肇慶府志曰灰鶴一名寒鶴出陽江似鶴而頭  
短灰色蓋鶴之別種也此説を灰鶴なり漢土より  
丹頂と草の鶴と云ふ似鶴と云丹頂よりあるは真の鶴と  
せむ其他を皆鶴の一種と云画にも此の如し

瓊山志云通身灰色去頂二寸許如丹

桂海志曰灰鶴大如鶴通身灰慘色去頂二寸  
許毛如丹及頰文半亦能鳴舞

本草綱目曰時珍曰有灰色是れなり

赤頰陸機詩疏

一名鶴雞本草綱目

鶴鴝正字通

麥雞同上

鴝鹿同上

和名マナ九州方言 マラマナ

西土より毎歳来る土俗は紙マナと云灰鶴の真鶴なり

故より其形状大抵同じく背蒼色より灰鶴と同じく  
之れも灰鶴の一種と云和本草にマナの色青と云

本草綱目曰頰云鶴雞状如鶴大而頂無丹兩  
頰紅時珍曰水鳥也食于田澤洲渚之間大如  
鶴青蒼此説の鶴雞是れなり

正字通曰鶴大如鶴青蒼色亦有灰色者長脰  
高脚頂無丹兩頰紅關西呼鶴鹿山東呼鶴鴝  
南人呼為鶴雞江人呼為麥雞此説より灰色の者

と云い灰鶴あり

陸機詩疏曰蒼色者人謂之赤頰常夜半鳴

此説のト夜半に鳴く云是れも此鶴甚く多く来りて棲む所通夜鳴て止むるがノ噪ノ声に在るなり

雀豹古今注曰鶴千歳則變蒼と云い誤なり蒼色の者自ラ一種なり

本草綱目曰雞集解下時珍曰楚中一種儉雞

高三四尺此説の儉雞ハ一種の雞の大きき物ニ同ニ誤ト云ハ

琉球鶴

其出所を詳しき次京橋の巻鳥家に出る事あり

琉球より来る物なり或ハ丹頂の雛と云ふは丹頂の

類にして小きものあり是も田原の希々見の事なりと云人

何れと云ふれども此鶴ハ非ズ朝鮮ハ小鶴と云ハ朝鮮

の釜山浦より出ると云乃チ灰鶴の種と近ク先年薩州

の山河と云ハ一貫人何れ朝鮮の地方へ飄流して彼

の地ニ至る久ク此人鶴の事を詳し辨む故ク鶴の種

類を同尋た彼の地ハ丹頂多ク白鶴も亦何れその他

小鶴何れ灰鶴也鶴ハ何れも又彼の地ハ廣東温

地多ク希々湖沼の廣し何れ夜ハ此澤潤の泥中に群集

るありと云キ雛ハ丘阜の草叢の上ニ生キ人捕るのあり

故よ人を見く跨 後をきりか

白鶴記永喜 一名胎化典籍便覽 胎禽本草綱目 仙禽上同

仙驥事物異名 仙客上同 飛客上同 露鳥群芳譜 零鳥事物異名 臯鸞鳥上同

丹歌名物法言 陰羽雅通 獨春上同 九臯君事物異名 還丹使上同 長

身容上同 青田翁上同 玄裳道士上同

番名カラア二ホウケル阿蘭記

和名丹頂 トウツル

今圖画よ書い是れなり又仙人の乗るも此鶴を画く

故よ仙驥仙禽の名号なり早よ露鳥と云情を此丹頂之

番國をも此鶴を指して云他別よ一種と云るなり

諸州共よ秋波岸の比より清く赤く志うれも此丹頂之

其中よ五つもの所 此鶴は朝鮮の地方に多く北地よ至てハ

秋群鳥の中に希に是れなりと云云形尤も大よして全

身白く咽の下より胸より黒く赤く冠なり翅翼の

先より陸攪及諸家皆誤く尾端黒くと云關山も

赤く誤く尾端の黒毛なりと云本朝食鑑よ云く丹頂は國

の物なりと雖肉硬く味美なり似たり是と云余も共く但

官家籠中に巻ひ或は庭地の間に貯ふそ性智なり

巢を作きよりつて卵を池に産むと云又富士山の下に

沼池なり是れ朝見池と云此池邊に丹頂一雙をく毎歲

雛を孕てそ雛を春云々未だりてそ父母四時を  
祈をいえとてそりと云それ等い乃仙禽仙客と稱する  
仙鶴あり

永喜記曰青田有雙白鶴年々生伏子長使去  
乃それとお同青田翁の名それは因ておそ鶴  
皆青田翁と通してそ翁ににひひ

梅誕生字彙曰鶴似鵠畏頸高脚丹頂白身頸  
翅有黒常以夜半鳴聲聞八九里是れ乃丹頂  
と云單に鶴と稱するもそら

相鶴經曰鶴不集林木と云樹上よりそら  
うらに大樹の古松のた鶴を画く詩人も亦そそ我海  
むも菊の原のそら丹頂のそら鳥と云此より一  
二尺位の小松の叢中に巢を作りそより暖先伏てそ  
そら脚高して卵を伏するありそら松樹の枝よりそらに  
つら文人画工此由来と云いて鶴の古事を畫はる  
予嘗て朝鮮に遊ひ一人鶴を問尋らにそら  
大凡の如く朝暮南北に往還する雀の群て飛つとそら其  
中に丹頂希につらと云そら彼の人知れ捕るものぞ  
そらをそらを知ると云故に予れ始てそらそ國の書に  
東醫家鑑行り此書に鶴の氣味を説くより又一説に毒

何れと云乎の知己の某、京攝の間、此を鶴肉と求む  
東邦に帰るる老親八十餘歲此翁は或人のて乃て歌  
を奈とて愈るるを五十餘に於て歌と名を禮とて遂に  
死を其他に毒と當り事と聞くと人其く是を謹んで亦  
事なり或は亦と種種に因て功徳なりとるをあり又  
案に明の以りの俗画と見ると皆鶴を画とせ級を問  
尋るに鶴は多壽ありに依り其毒を祝とせるといふ  
此意は和漢不同、世俗の云く鶴は日本の名ありといふ  
大に誤りあり其毒を新とせといふ朝鮮の地方の名あり  
と云へる唐土にも西北の遼東の邊より多く来り是故  
白樂天、靈鶴贊曰有鳥有鳥從西北來丹、腦  
火綴白翎雪開遼水一去緱山不迴是壽の女  
詩客文人も西北の地名を指して云る  
東坡放鶴亭記曰彭城之山岡嶺四合隱然如  
大環獨缺其西面而山人之亭適當其缺春夏  
之交草木際大秋冬雪月千里一色風雨晦明  
之間俯仰百變山人有二鶴甚馴而善飛且則  
望西山之缺而放焉縱其所如或立於陂田或  
翔於雲表莫則徭東山而歸故名之曰放鶴亭  
此文は依り真の鶴は其く人より馴れり物と云へり日本にハ



未だ放て又帰るとそのを少く

白鶴 本草綱目 一名皓皓 代

和名三口ツル

関西に見るものや 関已東に稀に來るもの有り 其形丹頂より少し小なり 越え雪白鷺の如し 一点の黒毛

本朝食溢し白鶴に類す 背黒き解に悉く純白なり

本草綱目曰 禹錫曰 鶴有白者 其れ有り

陸攬詩疏曰 多純白 實は純白なり

陽春縣志曰 鶴其類不一 有白者 蒼者 黃者 此

純白 白鶴あり 蒼者 蒼鶴あり 黃者 白鶴の雛なり 未だ

越え渡るものあり 其色 淡黄なり 其れを指して 黃といふ

一を 鏡を渡りて 雪白なる有り 秋北風來りて 未

是 鏡見たる 甚く 瘦て 容貌巧し 漸く 日を経て 羽毛も

光澤を生じて 肥ゆる 彼の地を 去る 悉く

昔て 棲よ 堪よ して 悉く 渡來る有り 是より 明春三月

の頃 至て 彼の地と 巧なる 時 三五日前より 田螺を貝

のより 吞食を 見せ 風を 隨て 天に 仰りて 其 状 貝を

或は 貝を 舞廻り 一たん 此の 空へ 直下を 凡そ 夜より

明初 彼の 地より 渡り 秋 渡來り 夜より 六曉より 及く

つらかり 薩の 是れ 毎歲 其 諸を 細く 記す 亦 亦 亦

所なきを夜より泥池の所より行く脚を泥中に踏み入る  
東都の鶴より丹諸を興るに名なきを〜それ乃て去年の  
鶴の年来た疑ひなく又其所の大樹切様を以て  
時に其所を迷て来りて故に鶴自ら大樹を切りて  
来りて如くものと忌むなり

ソテツル  
袖鶴

西土及関東にも希に見るものなり其形状丹頂に似く  
少く水なり全身純白目の色赤く翅翼を開く時にその色  
黒く乃て袖を開きたるに似たり故に名をこれ鶴中の異品

玄鶴 注 玄

和名マツマイツル

西土に曾て来りては松前より朝鮮にも亦て丹頂  
の一種にして玄黒あり大和本草に其形白鶴の如く毛を  
黒く頭赤く足黒くといふはこれなり

雀豹古今注曰二千歳則變黒所謂玄鶴也歳  
を経て重なるにけり別はこれ一種なり

陝西通志曰玄鶴崆峒山東巖有皂鶴洞洞中  
有七玄鶴相傳每見必主兵革

黒鶴 一名

和名十へツル

キヌカツキ

蘭山本  
草譯説

諸所共よ八九月に北方より群来る筑前の邊より  
 廣田の邊に於て五七百群を為す予嘗て此處に往  
 還して見よ濕田として皆耕したるがごとく田家甚く以  
 地方の害とし春よ至り耕時よ迄くと雖も逐々その  
 あり次第よ民の力を費せ又肥後の阿蘇山の邊より八  
 九百群を為す予十月を以て此處よ次宿を夜半群居して  
 甚く其噪く鳴く主人をく土民竊に捕らむものあり其時よ  
 至て如此噪く鳴く此國のほとと黒鶴の多く来るを以て又  
 隅州の飯野鶴藤満馬田此三村に下るに數百  
 群を為して皆田中の啄む皆黒鶴ふして希に別の異鶴  
 も雜り来るをその大サ白鶴より甚く小して度思らるる雛也  
 本朝余漁よく黒鶴白頭赤頬背黒く脚騶よ外  
 悉く純黒あり此鶴念く其味不羨

ムラサキツル  
紫鶴

先年東海道川崎町鳩田彦惣なる者の官家の鶴  
 飼あり或成多々群来る中に黒鶴二隻あり其種丹頂  
 の類ふして其頂紫なり是次古老よ問ふよ其れ紫頂露  
 りりと云彦惣は其飼ふは他の露より至く別  
 逆よ去々来るものな數百群を為し来る中必此二三隻

姉羽鶴 ア子ハツル

と見ると、ついでに老稚の差別は、ついでに別の一種の鶴あり  
志うれども漢籍に於ては、此説を見ざる可く凡鶴中の奇鳥

彦惣云く歳は同じ多く渡来するは、必ず一二雙を尋  
志うれども、吾所より居て、ついでに湖に付たり、と云う程

灰鶴と黒鶴の間、ふして背上氣色と黒と潤澤ある色  
ついでに目の透る赤く、頸のふし長毛あり、脚も赤く、一躰鶴の

中の上高るものなり、松前より野分の邊より見ると、ついでに  
江戸より、ついでに巻鳥家、皆京橋より相求く、その價を得る

食物は、宜しく、ついでに毒あり、と云々等、所謂珍禽と云うは、  
池に養て、眼翳を食し、悉くして、其異類を見る、近以、此

平鶴、譜小、幸なり、漢より、禽經、鶴、往、相鶴、往、行、皆、鶴、類  
の説を盡す、此、鶴、の、事、多、く、を、云、う、也、

相鶴經曰、鶴陽鳥也、而遊於陰、行必依洲渚、止  
不集林木

埤雅曰、形定而色白、食於水、故喙長、軒於前、故  
後短、棲於陸、故足高、而尾凋、翔於雲、故毛豐、而

肉疎、大喉、以吐、故修頸、以納新、故壽、  
博物志曰、鶴、髭、頰、散、耳、響、則、聽、遠、眼、亦、則、眼、遠、

其色似雪、是れ白鶴を云

五雜俎曰鶴即是鶴漢黃鶴下建章而歌則曰  
 黃鶴是也故戰國策說士或言鶴或言鶴交互  
 不一物周而音亦同也又案于陽春縣志曰鶴類  
 不一有白有黃と云といハ黄鶴も亦黄鶴あり  
 或又此類の外かしく異るもの尚多し志れども希に出る  
 物ふしてそ若号も窮先をくむ何處も秋彼岸の  
 比より遠く北地を去く後來明春二月より三月に入り  
 皆歸るそ来る時乃ち鶴を興く甚し重し網捕へ先づ兩  
 眼を糸で纏ひ暗室の人をあり靜る所に入置り大  
 なる器物未麦の類を水に浸して興ふれい空腹ありに  
 因く自分と念ふあり若し人聲多くとて噪ふと前  
 られ餓死と能く驚駭して喰ふを得たりと遂に死  
 とる所西土の鶴は好し其藩を喰ふ故に先づ其藩を  
 興く飼ひ付るもよく凡そ鶴の類久しく畜ふと雄も  
 卵を奪ふと只丹頂灰鶴のこゝにて菜を食し卵を奪ふ  
 必死卵は二ツあり雌伏して念を欲する所聲をかく雄は  
 雄来りハ嘴を奪廻して卵の腹ありや舌を改く雄は後を  
 雄伏し又念を欲する所雌は鳴く又卵を改く後を改り  
 凡そ三十日かして雛となり雌雄より雛を引く性還り  
 念を奪ふと嘴を奪ふと持し示し念を改む又嘴を奪ふ

教之學不遂はこれつゝある鳥をわとふつゝ白分と  
なす成長は是の故鶴の児は法名の児よりあること  
を早くふつゝ智の鳥も早く是の雲の鳥鳥  
なるもの智の鳥は唐土及朝鮮より入るものと云い  
又河蘭浣衣はカラアノホーゴ止とて彼國の五鳥の一也  
と云はれ乃ち名鳥なる故あり案に

陽春縣志曰鶴其類不一有白者蒼者黃各種  
而已丹頂黒者無有也此浣衣白鶴と蒼鶴あり  
又黃鶴と丹頂あり黒は此陽春縣志に有るものあり也  
又案に此黃と云ふは白鶴の雛を未だ梳せ過ざる

物ありて古人の黃鶴は仙人の号ありて案に黃  
鶴ありて此黃鶴様の故事ありて見らるる

鶴經禽一名老鶴盛京通志鶴爵深川志鶴雀後漢書冠雀同上

皂帔通雅皂君陸璣詩疏阜群名物法言負釜陸璣詩疏黒尾同上背竈同上

背雲典籍便覽鳥尾泉州府志大隱鳥鄉藥本草

番名

和名ク、井古訓 コフ エリク俗名

漢語抄に鶴の字をコフと訓むるに託ありク、井も亦  
蛇食の省略あり和名鈔に於保止利と訓む俗に鴻の字  
を用ひ誤りあり或は鶴の字をク、井と讀むは尤も誤りあり

鶴の字を用ひる一諸州共々四時よくて人知り易  
 然も里よりいれて希く関に東を多く常州涇州の地方に  
 捕て示るは如く洛南より八幡多し江戸より浅草寺の堂上  
 或は本所の羅漢の堂上に巢を為して其形状鶴と云ひ全  
 身潔白やして首より丹る尾は深黒鶴の如し故に黒尾の  
 号なり詩に鶴鳴于垓又禽經曰仰鳴則晴俯鳴則  
 陰と古人の語りれども遂に其鳴く声を聞く事あり且  
 背を叩て毛を為すの事先年隅田川の漢人より雛を為て  
 教に早解年を待て隅田川をり一鶴飄然として投来て  
 此漢人の語を啄んとし漢人幸に身得廻りて其害を逃る  
 之鶴得て舟底の板を啄る者七八寸と云ふ四十解年と雖  
 ても猶其人を知り其寢を報るの宿念人より勝る者あり其の  
 又彼遠の塔上に巢を為し何の事ありや史記を合さる  
 忽ち史を發せんと願ふ巢を為しむる所はれ何れ鶴と  
 異り鶴は鰻鱺泥鰌を食てく如く此の活物よりされ  
 食ひては好て蛇と食ひ

陸機詩疏曰鶴鶴雀也似鴻而大長頸赤喙白  
 身黒尾翅樹上作巢大如車輪卵如三升杯望  
 見按其子令伏徑舍去一名負釜一名黒尾一  
 名背竈一名皂裙又泥其巢一傍為池含水滿

之取魚置池中稍以食其雛若殺其子則一村致旱災

本草綱目曰宗奭曰鶴身如鶴但頭無丹項無鳥帶兼不善唳止以喙相學而鳴多在樓殿吻上作窠嘗日夕觀之並無作池養魚之說時珍曰鶴似鶴而頂不丹長頸赤喙色灰白翅尾俱黑多巢于高木其飛也奮於層霄旋達如陣仰天號鳴必主有雨其抱卵以影或云以聲胎之禽經曰鶴生三子一為鶴翼極為震陰變陽也震為鶴翼為鶴也禽經云古書云禽類之事於下

正子書云云鶴生三子一為鶴此非有鶴此二子生此鶴性自別有

梅誕生字彙曰鶴爵似鶴好水將雨則鳴此說實

遵化州志曰鶴水鳥而巢棲或樹巔或層甍以

水為田此說未信信此に多く次

揚州府志曰鶴一名黑尾善旋飛江淮人謂鶴

旋飛為鶴井

鉛山縣志曰鶴類鶴小無丹頂

深州志曰鶴爵高脚鳥性嗜食蛇常州の邊にハ

鶴と飼く媒と々々冬月鶴を誘集して土人は或捕らる春夏ハ



自ら蛇と尋ねるといふ

後漢書曰揚震傳冠雀銜三鱸魚置講堂前注  
冠音貫即鸛雀也

食物本草曰肉味酸無毒有氣疾者濕病者宜  
食多食癸瘡疥此說真也云々  
常州の麻苧の邊に  
雛と云く媒と云く 鸛と捕て食て其味酸

烏鸛 本草別録

和名ナヘコウ

先年常州の麻苧の邊に十六鳥と云ふに來りし  
其形狀全く鸛やと總て真也云々其首は白鳥の如く

曲頸有り好て蛇を食ふ故也或人其狀鴛鳥ありと云ふ

本草綱目曰弘景曰鸛有兩種似鴿而巢樹者  
為白鸛黑色曲頸者為烏鸛

當塗縣志曰白鸛青鸛二種と云此青鸛ハキヨロサキアリ

陽鳥 本草拾遺 一名陽鴉 同上

和名クロトリ

先年薩摩の田布施と云ふに來りし其形狀鴉の如く

全身真黒にして首長く灰白あり土人此名を云ふ故也

クロトリと云鸛と異なり五穀を食ふ故也鸛と異なりと云

本草綱目曰藏器曰陽鳥出建州似鸛而殊小

身黒頸長而白此說是也得之

白鶴子

本草綱目一名水鶴陽春縣志

和名ダイサギ

諸州共之其れあり其形狀鷺の如くして總身雪白玉の如く只其毛はくして頭は毛を翳黄より鷺中の尤も大なるものあり大鷺の名あり本朝余濫より一程鷺より大なり頭は絲をいと云是なり

本草綱目曰頰曰似鷺而頭無絲脚黄色者俗名白鶴子其白鶴子といふ形狀の似る故なり

當塗縣目曰水鶴狀如鶴而小類鷺性通風雨

有風雨則鳴而上山否則鳴而下海

廉州縣志曰海鳥夏秋夜鳴飛入山有颶風時

說乃水鶴なり

白鷺

陸機評疏

一名春鋤

爾雅

鷺鷥

禽經

絲禽

陸龜蒙

雪客

李昉所命

白鳥

本草綱目

潔鷺

典藉便覽

昆明

花鏡

雪衣兒

事物異名

篁栖叟

同上

岩栖

典藉便覽

碧繼翁

事物異名

胡王忽心

同上

荻塘女子

同上

風標公子

同上

番名

和名サギ 之ノサギ

諸州共之水邊池澤に啄之夜ハ篁中ニ栖む其形狀

大鷺より小にして全體雪の如く白春にまゝ總身  
其毛を生るも他の如く異り是は俗に鷺踏と云夏月味  
至て羨る人好て貴重を雀鳥錫り余経の色絶白や  
聲人の呼喚よりと云と云李氏本草に絲禽と云  
白鳥と云此鷺と指して云の首より其毛ぬく密く  
絲の如くあるといふ

禽經曰鷺飛則霜鷺飛則露其名以此步于淺  
水好自低昂如舂如鋤之狀故曰舂鋤

本草綱目曰時珍曰鷺水鳥也林棲水食羣飛  
成序潔白如雪頸細而長脚青善翹高尺餘解

指短尾象長三寸頭有長毛十數莖純然如  
絲欲取莫則 郭景純云其毛可為臙羅

臙羅ハ頭巾なり

變化論曰鷺以目眇而受胎此說非なり

當塗縣志曰爾雅曰舂舂頂有長翎如莖絲甚  
潔白集則舞而下

含山縣志曰鷺絲頭有細毛一鳴舂鋤一名屬  
玉

小鷺 一名一杯鷺

諸州共々水邊山澤に棲る其形狀白鶴子に相同なり

絶て小なるもの事なく其毛を生むれども白鷺の多き  
よ及び本朝食鑑に云くその小なるは俗に一盃踏ると云  
みしてゆく一盃の満るを履くと云或い云一羽踏るあり  
其群を為り常より獨遊すと云

朱鷺經禽 一名黃毛鷺臨桂雜識

和名 狸ノサギ アカサギ

諸州共より希より其れ乃小踏の一種ありて冬月  
白夏月ハ秋より背よりまき 鷓鴣のまき 紅色なるもの  
その他ハ小踏に異なりあり 凡踏中より上あり

養の觀既を看し 飼法ハ川綴め於那々川澤の小集

雨て飼あり

爾雅曰郭璞鵲目未詳小顏曰荆郢間有水鳥  
大如鷺而短尾色紅白深目目旁毛皆長而旋  
此其是乎鵲音旋漢書所謂朱鷺小貌也說文有  
臨桂雜識の黃毛鷺も亦これあり  
爾雅釋鳥疏曰楚威王 朱鷺含咎飛翔而  
來舞則後有赤者舊鼓吹朱鷺曲是也然則鳥  
名白鷺赤者少耳

褐鷺深州志

和名 蒼鷺アラサギ 水戸鷺ミトサギ

百白

関已東に多し夏月江戸日幸橋の奥店に出る魚  
と其形状踏の似く絶て大なり本朝倉瀬云く  
踏の似く大し歌背翅蒼黒頂に冠毛有り蒼黒頭上  
より頸より至て黒色斑翅の端翹純黒嘴外黒く肉黄  
し腹白脚緑なり形態悉く踏の類を毎に水中に泳  
て魚蝦を捕へる多し飛侍ハ能く高く舉り遠く翔く  
静るる時を芦荻に止り足を舉ぐ立く眠るを味  
最羨ふし白踏の類は夏月是を嘗て踏の最也  
深州志曰褐爵色類褐故名

関東に希に見るものなり其形状褐爵に相似し  
少し小なるのこそれも亦たまに日幸橋の奥肆に出る  
るあり味もまじく褐爵に異るなり昔あの人云く時  
とて多く渡り来るものなり何のさうも

青鶴當塗縣志 一名青椿同上 青翰本草綱目 青莊同上

信天翁同上 信天縁同上

鷓當塗縣志 鷺揚州府志

和名溝五位 水口鷺 キヨロサキ

先輩丹後のアホウトリ長門のヲキノタエウ九州のトリ  
クロウ又ライノトリ是以此青鶴の名と云ふはたゞ誤なり

諸州に田間及岸下の水の落る所に立く小魚の  
過るを伺くありて自ら働む故に信天縁の名あり  
海中に自ら立り働む者も天縁に信と云本朝食温  
よそく五位躰に似く小蒼色也

陶九成輟耕録曰瀛漢二州之境塘濼之上有  
禽二種其一類鵠色正蒼而喙長凝立水際不  
動魚過其下則取之終日無魚亦不易地名曰  
信天縁大和本草此説をいづくといふと云鳥は當らざる  
たゞ鵠ありといはれざる

李氏本草鵜鵠條下曰信天翁終日凝立不易  
其處後魚過乃取之所謂信天縁者即俗名青  
翰者也又名青莊又案之河間府志の青鵜鵠  
禡爵一當らば非なり

松溪縣志曰信天翁候魚鷹所得魚墜地拾而  
食之魚鷹ハニサコあり此説甚く迂きなり只水中の小  
魚の過るを伺く意あり

當塗縣志曰青鵜大於鷺小於鶴背有青毛立  
淺水伺魚俗名青椿舊入夏今鷺

揚州府志曰鷺不能没水終日佇立水中急流  
處以伺魚蝦人呼信天縁是等の説を見れば鷺も

鶺鴒 青鶺鴒なり 云々れも 鶺鴒の水と風を好むと云々なりと云々此  
青鶺鴒の水を好むと云々

水鷗 俗名 一名布袋鳥 同上

和名五位鷺

和名抄に鷓鴣に當て伊微と訓を伊微ハ古名なり

鳥に因り鷓鴣に云々を享保中清朝の醫師周岐

来台命と云々此鳥を見く水鷗一名布袋鳥と名を

彼の俗稱なりと云本朝語園に云く人皇六十年代延喜帝

と云醍醐天皇なり此帝或時神泉苑に行幸の時鷺

池に立ち不立五位鷺是也と云予案に是れハ常の白鷺

なる鳥に五位鷺と云々に因り後人誤り伊微と云るあり

鳥に又平家物語に云く昔に近衛帝神泉苑に幸り

侍長と宴飲を池中に踏らり五位若人の命に捕

むと其踏飛走んと其藏人叱りて云く宜きありと云ハ踏伏

しと云く是れ我捕りて乃献之帝感して爵五位に封と

と云是れハ因り後世五位鷺と号せり得たり

諸州共く水邊池澤にり閑已東に尤も多し其形状

青鶺鴒に似く少く小なり總身灰白色にして白斑を帯ふ

此斑は數等なり本朝食糞に云く數飛侍ハ先づ火の

と云く夜目最明なり大なるもの岸邊に立く巨人の云々

人より此鳥に過ぐ驚懼一妖怪として敬ふと云世倍々  
能く人を迷はせしむ此鳥あり魚

山家五位 一名星五位

諸州共々水渾の地はこれあり其形状五位は相同し  
少く大なり總身鶉の如く斑文ありこれ有り五位の一種  
本朝倉瀬の云く状五位は似く頂の黒毛冠の如く頬白  
して淡紅斑淡黒斑相文り胸前以下腹脹より淡紅斑  
稍大なり背翅蒼白翎羽黒し俱く小白圓紋星の如く  
一各くと云々味も亦くお難く夏月在り魚

姫五位 一名芦五位 凡惱鷺

諸州共々住く蘆洲の中は栖むる大サ鳩の如く  
身鶉の如く其形容全く五位の一種なり蘭山云く青  
鷺に似く小あり是れ乃五位鷺中の卷く見らるる也  
洞法は籠中より水を置り川蝦を生きて放ち與ふ魚又  
沼池の小魚は盡く在り一説は旋目ボニノラサキ又ヨシ  
コイ芦葦の居る踏に似く小嵐色目溜して淡く目胞毛  
長如渴卷 旋状尾短夜鳴

脊黒五位

諸州共々住く蘆洲は是れを見る其形容五位は  
脊上黒く先より五位の中尤も見らるる物也春を雛



取つて飼ふと秋を新らるゝ取得り漫漶泥稿の類とて  
胡ハコ付て胡ハコ魚イサギ

漫畫

録 耕

一名

和名 トロサギ 沼鷺

ヘラサギ カウカイサギ

田中を耕む犁を漫畫と云此鳥泥を浴むる此犁の

と故に名付此嘴の形を以篋鷺と云皆形多あり

諸州共産此田間腐水の所よりく嘴を以て泥浴

む其形状鷺に似て灰白なり本朝食温と云く白鷺

に似て冠毛をくくして純白なる沢渡灰色と云く長喙

黒嘴を端圓背く起の如く篋のこく性多群を為す

終日嘴を以て水を畫し泥を陶して魚を求て息の

停るものや胞付の石より三樹の窟あり林抄の果を

為る人未だ其味食むるを好む故に其臭味を亦る

得むと云

輟耕録曰其一類鷺奔走水間腐草泥沙啜啜

然盡索乃已無一息少休名曰漫畫

本草綱目曰晁以道云鷓之屬有曰漫畫者以

嘴畫水求魚無一息之停

范涑典籍便覽曰漫畫狀類鷺奔走水上不問

水腐泥沙必啜啜然畫索之而後已無一息少

休又常以嘴畫水取魚故名此說皆當れり農人  
田中と鋤むる物を謾畫と云此等の書に出るあり馬鉞ツグク  
と書くハ穩當なり

鷓鴣本草拾遺一名鷺鷥說文旋目上林賦紅鶴本草綱目朱鷺禽經

和名トキツキ タウノトリ

日本紀私記一桃花鳥と云れども未だ出處を志す所  
和名鈔一鳩の字を用て豆木ツキと訓を又源順ク云く  
玉篇一音嘲赤啄自呼之鳥也又鷓の字を用也  
今ハ鳩の字を用いて佳あり西土ニ希あり關已東に  
多ク水邊池澤ハ又ハ是を巡りテ其形狀鷺の如し

て到く大ニ致すと長毛有りて首より背に垂る頰  
より兩翼の上紫紺色俗に所謂トキ羽色是の色也  
紫黒く脚高く雞距の如く色赤黄なり凡ソ川の下  
流より小魚を尋て上流に登る鰻鱺の如し生る首を  
轉して漸く教を皆吞く吞こむる鷓鴣の如く比翼  
鷓鴣トキとして箭羽を用也此を捕へて首を縛して殺す時ハ  
血液を尾羽に飲して其色甚く美し其色の浅深ハ  
ハ其教を術巧く志するの如く又的々人ニ訓るるあり  
能も其雛より卷ふ時ハ人ニ訓染を如何乃鷺トキと同  
梅誕生字彙曰郭景純曰鳩似鴨而大長頸赤

目紫紺色是説之う志之れも本草に諸家此鳥と  
之を故に其説く所皆此鳥の形状にあり

本草綱目鷺條下曰又有紅鶴相類色紅

又鷓鴣附録曰旋目水鳥也生荊郢間大如鷺  
而短尾紅白色深目目旁毛皆長而旋上林賦  
云交晴旋目是也鷓鴣と旋目と云鷓鴣と方目と云同類也

故あり

鍋鷓<sup>ナベトキ</sup>戸江<sup>ナベトキ</sup> 一名鍋被<sup>ナベカカリ</sup>東<sup>関</sup> ツクロ

西土より更に見るを關に東より田間野水の邊に  
是れなり江戸上野の邊より四五月より来り椋樹の梢

群集して巢を作り雛を母を其の遠方より飼  
持来て其雛を巣より人より卵を取るを其の  
之形状全く鶉に似たり只首上より深き  
鍋と被りたる如し故に諸名有り

飼籠鳥卷之十八終

小春念日鳥

飼籠鳥鷹部目錄第十九卷

勝成裕曰鷹鵠ハ人群を逃れて山間ノ溪ノ  
群禽と離れ群禽を食ハ粒食せども人の田  
圃を害セ人ノ拳上に卷ル是故放て乃チ  
畝は是れ人の近所の名禽あり是故ノ群  
禽の終リニ附シテ人心ノ歸をそ致ル也  
多クと雖も鷹鵠方に載るの卵只そ軟小  
て四十八種の名号アリ其書籍ニ亦ノ頗多  
ク其考証ニ至テハ未ク研窮セざる所アリ猶  
又後者の辨明を待事ス

鷹令月

製羅

圖式

聞見常談

日本鷹相說

滿齊

鴨

鴝鷹

醜鷹

養鷹詞

放鷹

相鷹歌

鷹賦

飼籠鳥鷹部目錄終

飼籠鳥卷之十九

鷹部 一種 并有圖

鷹令月

一名迅羽

西京賦

猛鷲

事物

青骹

同上

倉鳥

同上

征鳥

事物

鷓鴣

陽春縣志

角鷹

雅

凌霄君

事物

決雲兒

同上

黑漫夫

事物

嘶那夜

梵書

凌霄郡君

事物

曷里朶

合

事物

番名

和名夕力

鷹の類都て北方の夷地より来る其雌雄相分々  
うゝ案るに鷹賦云々雌則體大雄則體小

也ト云雄ハ小ニシテ兄鷹ト云雌ハ大ニシテ弟鷹ト云  
雌を用テ雄ハ用ヲ為セシク或亦加日に向ク凡の  
透明なる雌ニシテ又博物志ニ此等の説あり沂州  
志曰大曰鴻小曰鷹是ハ雌雄ノ名ヲ異ニ  
シク和漢相同ニシテ又海岸の崖中ニ棲ク巢ニ  
作り雛ヲ孕ムルコトヲ雛ヲ捕ク習撃ト云也  
是ハ巢ノヲシテ網ヲ捕ルト云往年  
放ク今年又捕ルト云山返ト云又春捕ルト云小山  
返ト云羨ニシテ年ニ越スト云撫鷹ト云鷹賦曰二  
周作ニシテ鷹ノ巢ニ鶴ハ山中ニ年ニ越スト云黄色ト云  
テ脛ハ黄ニシテ所謂山返ト云三才圖繪曰一  
歳曰黄鷹ト云赤毛ト云若鷹ト云又三歳曰鶴鷹  
是ヲ蒼ト云又鷹賦曰千日成蒼ト云是れ千日ニ三年也  
定家卿の鷹の歌ニ今幾年の鷹ノをハ海ニトクハ  
四歳の鷹ト云ル

埤雅曰一歳曰黄鷹二歳曰鶴鷹次赤也三歳  
曰鶴鷹今通謂之角鷹頂有毛角微起是幾年  
と云テ頭ニ毛角ヲ生シたるト云角鷹ト云今通ト云ト云  
鷹の一名を角鷹ト云ル時珍曰頂有毛角曰角  
鷹又曰鸚鵡ト云是れ乃々老鷹の別稱ト云ト云

志うに和本草及蘭山本草譯説に角鷹、雄ノカ  
ありと云ふ大ニ誤なり

禮儀詳註曰鷹又曰角鷹其頂有毛角微起故  
名此說鷹又と云ふ別種よあり鷹ふして又角  
鷹と云ふあり是れ此說乃チ鷹の一名ふして雄ノカに  
いづごとの明ナシ白鷹ハ總身雪白あり希ニ北方より  
来らるり又黑白相间り是れ我鷹と云ふ異品あり  
當塗縣志曰鷹蒼白黒三種今惟有蒼者亦麻  
色俗稱鷲鷹此說鷹ふして蒼白黒の三種あり是れ  
鷹の異品ありと云ふ也

陽春縣志曰鷹鷲鳥書曰鷲鳩也傳佺鷹賦左  
者若側右視若傾頸翻二六機運躰輕月令孟  
秋鷹乃祭鳥註欲食鳥先祭鳥不食似人祭先  
代為食之人也

唐會要曰開元十一年同州進五色鷹是異品也  
毛色ハ一様なり只容貌を貴むる凡老弱よあり頸短  
く頭小よあり背はまう胸も平に肩短く腰弱く羽廣く尾  
の末開き脚低く指大よ色赤黄此相備りたる醜鷹と  
云ふ相ふして氣躰も弱く大鳥を恐て小鳥を好むの志  
あり此他毛羽の變色ハ只奇鷹ふして此相なり醜鷹ふして

羽ひりし相書具て鶴の如くある大鳥を捕る  
 實の臂上の雄物に是或胡より久し案に日本紀仁徳  
 帝四十三年百濟國の酒君と云ふ人來り鷹を養ひ  
 雄を獲せし是より日本より鷹を飼ふを知りて後  
 より鷹を玩ぶもの尤も盛るるなり定家卿の鷹の歌  
 三百六十首此等より之を録し又西國寺實業公の歌  
 數多し相鶴鷹のこゝに大鳥をあるる近世の事あり  
 其術も亦古以來益々多し如此大鳥をあるる古人  
 嘗て云ふ如き名鳥なるゆへあり相鷹の歌に復の末  
 より毛漸く落く冬にむして止む他鳥の鏡のこゝ一時毛  
 羽共落く翔飛し不便なるに可し此は自然の  
 理自ら備りたる物なり此鏡の終りたるを返と云袖中  
 抄に時を去るを云ふと云尾羽落く本よかへる意あり  
 其を屋敷の如月の八日に入し七月十四日は此と其入る  
 時に羽蟲の藥を飼く入る古令に是れ可し其歌よ  
 鳥屋に入八日やくし此日るれをたうに羽蟲の藥飼  
 かん  
 相鷹の世上にあり松前を最しと云其他奥州仙臺  
 の山中或は會津白河及常州水戸山中より是れ  
 捕る都て真羽より多し是れ捕る法秋彼岸の時より



山中の鷹、高原のより大木一二を残り、冬迄迄皆  
切拂て去り見て見之渡りぬふして網場を定むる凡  
七月上旬より仕掛て九月下旬までその中に捕をとり  
何れ良鷹、暮秋より来る初冬より又多く来るあり  
是も土の遠近によりて遅速あり、唐土より朝  
鮮の地方より秋より来るあり

五雜組曰鷹産於遼東渡海而至登萊其最神  
俊者能見海中諸物輒撲水而死故中國之鷹  
不及高麗

又朝鮮より北方より来るあり案るに

鷹鵲方曰七月上旬為玉時内地者多塞外少  
然れ朝鮮の鷹術ハ自ら精しきるる也其内地と云ハ  
朝鮮の邦内と云々塞と云ハ邦外の胡地之順和名鈔曰塞  
正作塞塞險惡之處所以隔内外也先代反和名  
曾古云云此名未し呼者云云書籍に於てサイと讀  
射那の事に見るのこ又字彙に塞古文塞字又塞同塞  
又隔也鼻界也と云云然れ險惡の處にも又蝦夷松  
前の如き皆塞外あり又兩朝平壤録曰朝鮮北隣女直  
と云大清會傳より考るに女真韃靼の東北に在て蝦夷  
の人支夷と呼者是れなり兼燭譚に所謂中國の東

北の夷ありと云長胤の蓋簪録にも日本之北對朝鮮女  
直と云日本紀の所謂肅慎あり蝦夷の人支夷と呼  
郎肅慎と云るあり乃古三代の時の肅慎より國  
語の所謂仲尼在陳有隼集於陳侯之庭而死柶  
失貫之石砮其長尺有咫陳惠公使人以隼如  
仲尼之館問之仲尼曰隼來也遠矣此肅慎氏  
之失也昔武王克商通道於九夷百蠻使各以  
其方賄來貢使無忘職業於是肅慎氏貢柶矢  
石砮其長尺有咫先王欲昭其令德之致遠也  
以示後人使永監焉故銘其柶曰肅慎氏之貢  
天竺等の法説の據る時は集越鳥の産るより古より  
扱又鷹鵠の書せし行るもの尤も多し予嘗て誦讀  
するに其趣大抵相同し取用て益を得るにたゞ此  
其術を孰く盡し近時松前の源廣長が撰る飛鷹  
録を得るに其要を撰てたゞ著述の志より其松前ハ  
所謂日本の東北より古より北地の夷と稱はるれ乃チ  
日本の肅慎より其鷹鵠隼鵬皆北地より出るに  
土の人の著作より其説真に近し且又鷹鵠を何人ハ  
常に北地出產のる不及若し其書を閱み果して一  
誦讀せざるを欲し故に其要語を示し其説を云く松

前々を意をある法の秋七月上旬より九月下旬まで  
 年にもうて初を中旬以下も到る鶻の巢立早しと鳥  
 ようにたつたものあるれい仲夏下旬より窟屋の用意  
 とあるなり良意の暮秋以後出る事多し一凡意を捕  
 べ天氣の晴雨を考ふる一東風雨を起して雹  
 變し忽ち白雲を拂く青天を靄を羅し取法則の  
 一雨過く鶻必と深山をかつる山林人家より近く鳥  
 の聲し心を付し一ぬ山より蝶鳥を撃つ鹿をよめ  
 意の耳れ鶻の眼色形容する變はし時鶻を守りぬ  
 田舎をある魚のしを意を述り其為は楮木の長たある  
 一二町あり三三四本立魚一と近き山林近く  
 餅本数幸に及ぶ鶻の殊に獲りしものあるれ摺合の拍子  
 と意悟るを物と次窟屋の小芝の塊を以て造る前  
 窓の昂ち出入の戸口より葦の小簾をたすの外訝るぬ  
 かく自然山の如くある魚窟屋の後より時うたる岩根  
 或は樹木の茂るを忘るり尤も其地形より一鶻鶻  
 共に窟屋同歩ある或はとと黒國の書に窟屋ののん  
 元は此方より鶻鶻の翔る魚の所を見分る意をあるの  
 處と草屋を見て時と云魚とたは一本藩とい及部ヲヨバ  
 離山時是也時字はるる魚のし時字字景と時仁也  
 記作

切音時鑿垣而棲雞詩王風雞棲于埭其地名也  
是のよめれと強てそ名を呼んよ、栖の字の志うる魚をい禽徑  
陸鳥曰栖水鳥曰宿ト云ミ、それハ蘇子瞻、後赤壁賦  
よも攀栖鷗之危巢、句、行、合、己、ふ、と、得、と、草屋、ノ、名  
らに、窠屋の二字を以て、也、固、と、予、杜撰、は、し、大、字、の、親  
二倍、少、の、意、あり、然、ハ、此、書、を、看、ん、の、怪、む、の、由、也、ハ、

制羅

鷹鷗方曰綱目方一寸八分縱八十日橫五寸  
日以黃蘗和杼汁染之令與地色相似、能遠  
視若動、所疎身隨其所、視候之焉、杼者、椽、實也

愚案、ハ字彙に綱目庖犧、近結以漁者、又曰罽  
音裏捕鳥網、是、以、正、と、云、魚、ノ、然、も、羅、字、を、用、也、非、之、  
と、セ、を、説、文、ノ、羅、以、絲、罽、鳥、也、又、罽、羅、の、二、字、禮、記、  
よ、お、く、たり、本、蕃、鷹、羅、を、制、む、の、法、方、一、寸、五、分、  
縱、五、十、日、橫、四、十、五、日、也、隅、目、ノ、と、ろ、と、ろ、ハ、方、一、寸、  
五、分、ハ、三、寸、と、ろ、ろ、此、制、法、通、シ、テ、鷹、鷗、の、羅、と、云、己、下、の、  
小、倉、の、羅、を、其、好、に、任、セ、羅、目、繁、カケと、云、ハ、罽、カケに、  
通、シ、羅、を、扇、面、形、ノ、制、む、る、もの、行、リ、皆、そ、好、ノ、と、ろ、  
魚、ノ、只、輕、カケと、云、ハ、と、云、外、に、奇、好、を、求、む、魚、の、ハ、次、  
羅、を、漆、む、る、も、掃、漆、汁、ノ、亦、可、也、土、色、ノ、混、せ、ん、る、為、之、

鴿ハ和名イヌバトよして今云土鴿也鳩ハ昂チ山バトよ  
 して毛羽を依り然れども媒鳥もあつたり雛雛の如  
 くに己むを待ては是紙用なり黒土よ白斑の鴿を用  
 ぬ魚一空中の魚もも視をくひりあがり茲よ云所  
 ハ予う所試の齋羅の法と著て云大概と示をり尤此  
 一法を規矩と云魚の一本藩齋師本間幸吉夫名貴岡口  
 彦六名意等捕魚の術に長一たり彼等の法ハ齋羅成  
 獲るの時よりいふされい根より山に登るを云所と云一故  
 と契あつたり半ハ小く館中の僕よ謂て曰時と移され  
 して某し鷹を獲ると便戸を先山より果して遠に  
 去妙を得る事如斯

圖式

凡鷹鷂を捕るは云翔る魚を所を戸一窟屋を造り  
 ろう始く先二節の繩を張り渡る魚一第一の繩を餅木  
 渉りと云第二の左繩を掛留と云第三と地引と云是ハ右繩  
 有り相場所の廣狭と羅の大小と以て繩の長短を積  
 るる魚一尤其日の風勢と因り翔場の左右と定メ羅を  
 張居魚一本餅木の外に遠餅木散餅木の法を以て  
 窟屋の後ハ餅木と云魚より地摺の脱ハの如  
 形兼羅と張魚はらん宜く其羅目と云と魚一然れ

鹿島来て終日の勤勞を空ツル前後の風勢より引繩  
 の餌木苗をそそはしめり魚一引繩の本よりハ中打  
 云ものをほく魚一如此ふし中に一穴を設く鹿島  
 へ鶴と擧さんとき雨もそ程よく引かく魚一繩引  
 満る時ハ小魚の款羅目より腹もゆり又雨急ぬれ  
 引繩はゆるとあり早且し心に心と付魚一そ時ハ餌木  
 苗をそ心得魚一此苗地より七尺をそ別とせれと  
 場所のちるにちる魚一節苗の繩過つて媒鳥竿を櫃  
 より引越せる時向引もどまんる為地杭一穴を設  
 繩を引通したるも可也今圖は前々車仕懸の櫃成  
 以て云里をそぬりより小芝の塊を蓋したるも一櫃成  
 して音らそをそい櫃媒鳥竿共々地形低りに利あり  
 綱竿のゆへに合とく仕うめたる可あり尤も地形  
 ちる魚一籠櫃ハ四方の廻る為とて三弦胴の如きもの  
 内もとり仕懸をそるりあり張懸たら羅の形ハ  
 如此歪斜なるも一然るれハ本場よりゆへ引越さる  
 けり圖如左

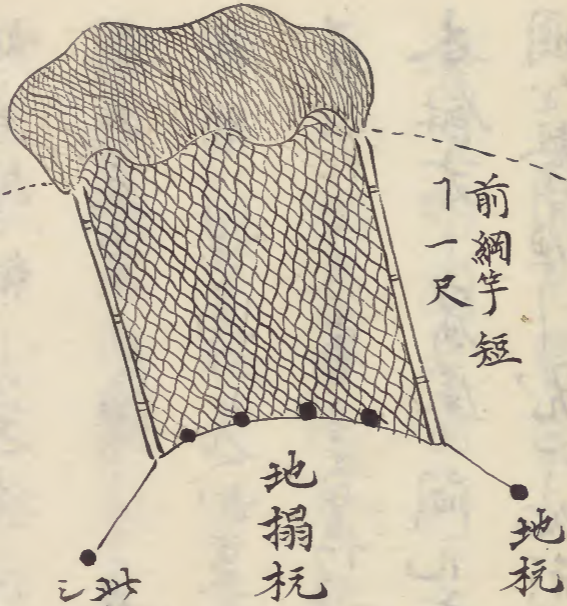


一綱竿ハ木を作りたるより尤古なるを用地引のちにかも  
 里と付るも可之竹をそ袋と地摺の方へ吹付てけり  
 一網袋ハ地引より度々引おさゆりハチキと云ものも置



本飼木

後綱竿竹根ヲ依リ方ニス  
前後長短ノ法羅ハ地上ヘ  
スヘシクヘシ



前綱竿短  
1一尺

地杭

地搦杭

此杭キヒ  
シク打入シ

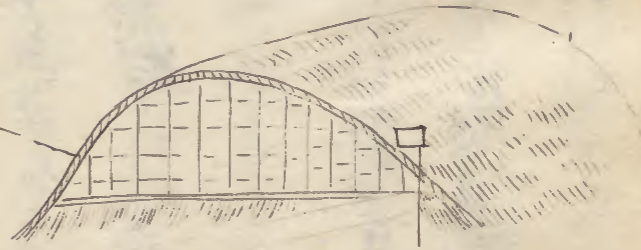
水筒  
地中植置ヘシ



手纏草旋子ヲ  
ツル

窟屋表高三尺五寸  
真深四尺五寸  
窟屋裏茶ヲ以テ造之  
真ノ方地低クニスヘシ繩ヲ  
引コムトキ可也又湿氣ヲ  
去ルノ益アリ

此所手觸  
羅連カニ  
引繩  
五ツ妙トス



横窓

路敷是ハ引コムトキ  
足ヲクケニカ為ニ

媒鳥竿

るつれと強て求むる魚なり

一 媒鳥繩の類皆地色に混る魚細をうとと

一 樞ハ墨よりぬる魚外に巧機とてあつる魚この時油

と引魚

一 媒鳥竿細く之よりうとをうとと條井可有是れ

引立空中の鷹もも見んり為る

一 水筒ハ媒鳥の足お置魚然れハ鷹をかそれて空

屋をたつり寄らるり餅米ぬり置ても可なり

一本餅木と空屋の間凡十二三間有る魚其中央に

因を繫魚一丸その他形より魚

聞見常談

朝鮮李爛

鷹上則圓大下則尖殺如菁根者良○背柱圓

厚背端長者壽背柱薄且小者短壽不才○小

者足粗大胫長者良大者足清勁胫短者佳皆

貴瘦硬無肉鱗甲麁而思起者良最忌軟細而

伏○或云小者胫長則無刀大者胫短則手鈍

○指如十字爪短而直者佳指同川字爪曲如

鉤者下也○劔翮幹勁葉薄大如鋸刀末端直

挺不内曲者快○方云翮短飛急然翮短則無

遠飛之才○大者翮端尖銳小者稍廣者佳○



頰欲圓短頂欲秀長○目向前而深者良若向  
腦而凸者性悍○上睫廣旋毛茂者壽○側身  
而坐橫躡架者良○起架土翔架下回架上者  
佳起架上而直墜懸翔者亦佳右皆高飛架下  
起而架下翔者不佳○鷹肌惟於曉頭定其肥  
瘦○黃水赤水為上淡黃淡赤為次白水為下  
或云淡黃亦云有黑水者亦一種也○栢子點  
絲點蛭點土卵點布紋半照布紋土卵紋等者  
號頗多而駿駕不係於是云或云蛭點壽絲點  
不才亦非的論也○海青與鷗鷲形體略同而

鷗鷲則尾短與鷲齊海青則尾稍長如鷹此  
其異也且皆栢子點雖陳不改但陳則點差小  
○海青有甚小者鷗鷲亦有至大者○北人稱  
海青純白者曰白松鷲半白者曰蘆花松鷲黃  
紫者曰黃松鷲青黑者曰青松鷲或云玉松鷲  
○海青雖大風逆風了無掀簸直逝尤疾搏鳥  
不中則張翅緩浮雖甚遠聞呼即來此其奇也  
調養肥瘦與鷹一同但積久始調不得欲速也  
鷗鷲貴瘦之肥則徑去不顧○大抵海青鷗鷲  
皆利平原大澤不宜灌茅叢薄○鷹鷲臍下細

羽無點者不才○鷹鷲身如圓木左右前後視  
之如一者桂

愚案に此説奇なりといへども悪相の鷹も亦大捷と云  
るに一概の心得なきを知らざるなり眼中より子細  
らざる事古法を考へるに例下に見へる黄ハ當歳  
也鷹賊中も二周を鶴と云ふ事少く年を破る黄毛衣  
を脱し眼中紫根胫黄なるもの少く今云山故是之諺  
能らざる鷹ハ凡と云ふと云ふ格別の譬之るれと李燭  
所謂凡短而直佳也と云ふ相應せり平胫小凡ハ希なる  
ものなれば世の中に黄足より凡ハ多けれと小凡平胫と云ふ

里なりと云ふやれハ黄足を取らざるに赤精黄足  
細骨小肘懶而易驚と彦深も云置けり云れを  
黄<sup>キ</sup>胫の雌鷹と云れたる逸物なり眼骨の二相を  
てハ身重して常ハ身<sup>ト</sup>屋<sup>ト</sup>悍<sup>ト</sup>を云ふに志<sup>ス</sup>魚<sup>ト</sup>ハ此也  
身重ハ力<sup>ハ</sup>巧<sup>ク</sup>故<sup>ニ</sup>賦<sup>ハ</sup>所<sup>ニ</sup>云<sup>ハ</sup>の若<sup>ク</sup>金<sup>ト</sup>ハ是<sup>レ</sup>也  
鷹相鷹術の旨ハ師傳に授けりも數百鷹を子摸  
試て後之妙を情る魚記あり古ハ天子といへと自<sup>ラ</sup>御  
鷹を拳<sup>ニ</sup>御<sup>ス</sup>玉<sup>ハ</sup>ひけされハ古今著聞集に桓武帝御  
政の後ハ衣冠をぬきおきしゆ<sup>ハ</sup>鷹<sup>ハ</sup>司<sup>ハ</sup>の御鷹を危  
み免して御<sup>ス</sup>玉<sup>ハ</sup>ひけり<sup>ハ</sup>又御手づ

ら菊丸ををいりうせむひは昔の鳥さ〜にも人  
 の引出物候い鷹馬をぞ賜ひるとき又一条院の御時  
 湯秋苑の鷹ありけりいにも鳥を取ぞうけれいんだんの  
 鷹を粟田口十禅寺の辻にけりあそ人に見せしきり  
 けり人馬よりあつて此鷹を見らるれ遠め上るはゆかり  
 ときて行過りけりき時湯鷹のゆめて是は御門の湯鷹  
 也志うる魚いりりか〜殿感にけりけりか〜と云ハ此  
 人よりかきるいりりか〜殿感にけりけりか〜と云ハ此  
 ところか〜ぬ鷹人堂へま〜いりりか〜と云ハ此  
 一けりか〜件の男をた〜れ〜御鷹をま〜せたりと云ハ

御鷹の下  
 上院司のまを

南殿の池の行きて殿覧をなすけり出御けりて池に  
 まあぶを海にけりい真行けりり浮ひたり鷹海けり  
 やりけりけりせけり即ち大なる鯉をとりてけりりら  
 やりてとりけり御鷹を〜先怪目と驚けり〜と云ハ  
 召問れけり此鷹い〜ふ腹の鷹少く先母は振舞成  
 見て後より業をい〜ふ海けり候を人より〜をさる  
 いて今浦で鳥をと〜せ候いぬありと申けり殿感甚  
 く信濃國の郡田園ありと云ハ〜れけり檢使豊平とい  
 是也又徳倉將軍實朝のとき鷹の目櫻井五郎  
 鷹術の名譽をほととよむにり御劔をとり〜と東澄

一見たり然るに本朝通記中實朝を頼家と作る誤り

日本鷹相諸説

西園寺流鷹書云翔一空一向高翔鷗と名付く  
第一の相と云思案々に西園寺流の書ハ藤原基規之  
所撰也李爛起架上翔架上回架上者佳と云即是也  
本藩第十一世傑巖君の千年と名付けられたる鷹ハ  
俊逸良才小して之形容甚長大なり是又古人の所謂  
重若金云異るる相なり此鷹の翔是説と云もた  
りハ且そ翔翅をかくして隈りに加ゆるを翔の脱落と云  
鳥の大木をとりてハ解聲出て必大鳥と云に云例也

顯一ぬ希代の鷹あり又先君の吳竹と名付けられたる  
鷹も千年に方ぬ奇鷹あり一日吳竹雁を獲るる七手  
先君其取所の雁を急生鳥と一畜し吳竹再び獲る  
取よりさし置れぬを知らぬもの鷹あり古人の至鷹則  
無所不噬矣といふ格別のあるる鷹其主を知らるるも亦  
衆鳥と異也古説ハおもふたりと詠たり是鷹師の面  
をみるなり李爛も鷹性巧知主知家又知好悪と云へり  
古昔重明親王鷹を好みけれハ藤原の忠久鷹二隻  
を連糸とせけれと云能をいふと云止ぬるも今昔  
物語見たりされハ鷹師の鷹の善悪勝劣を論る

無用の事あり十に八九は鷹師のちや備ふるより鷹の不  
能とい云々たる也

同書曰乎の下に翔て落て凡と云々構を以て翔ふ釣瓶  
といふと云て見して行へば良相あり

愚案るに此翔の意は凡と云て心は凡と云々本藩予り米邑

及部旧記及作旱 松ヶ崎より出づる意は此相也予名けて虎翼と

呼ひぬ古云鳧居の鷹も云へば癖物ありて予性甚

急よして漲水大河も亦鴻雁と放たむ良鷹ありは此

邑福山城より近して市中に異なると鷹性悍とい必と人

里近くおく鳥鷹ありと挫ふ也人を畏むる多し皆良

鷹に近し先彦詳雲の時手つらく真鷹を提し秋

篠と名付られ鶴も此所より出たり予り十八九歳

の比先彦より訪て来たる意に吾輩の逸ぬは此鷹も

亦羅捕に在るにけし鳥を提伏せたるを人の得く呈

せ鷹あり此意全備の美相あり架居の容は古人の云植

木の如く項平よと削た似たり其雄心たると此は新

鷹より臂せしに冒して條チハと云へば死ぬは鳥を

捉むたるをいふ秘苑にけり次第に鳥をあるの置

たるものと取れ予り心より前より所謂千年鳥好しと

かぬ良鷹ありといひければ其名を春日野と付たり

恨くハ此鷹生涯鶴鶴の如ク大鳥に得遇ハテ空ク良能也  
て朽コシハんるを

三糸家鷹書曰蔓青第一相と云容如左愚按は是  
蒼鷹ハを画けり青則菁字なり李燭ハ鷹ハ則圓大  
下則尖殺如青根者良其説既ハ上ハ見えハ是青菁  
通一用多しりハ此鷹極妙ハ滿齊と出る亦文字を  
通韻あると用蔓菁の容頸長ク目紫根より毛茂ク骨  
太ク毛衣長脚肩平りに尾と一枚ハ振らる胸高く架  
居よ瘡ハ志備らる容と称美せり

第一相蔓菁



第二相鳥居



鳥居<sup>カニ</sup>第一相心い<sup>カニ</sup>や志<sup>カニ</sup>はあ<sup>カニ</sup>く<sup>カニ</sup>い<sup>カニ</sup>なり<sup>カニ</sup>出<sup>カニ</sup>り<sup>カニ</sup>射<sup>カニ</sup>を<sup>カニ</sup>居<sup>カニ</sup>か<sup>カニ</sup>  
 りて尾羽とたる<sup>カニ</sup>こ<sup>カニ</sup>は<sup>カニ</sup>常<sup>カニ</sup>よ<sup>カニ</sup>拳<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>む<sup>カニ</sup>紋<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>類<sup>カニ</sup>  
 け<sup>カニ</sup>鳥<sup>カニ</sup>の<sup>カニ</sup>圖<sup>カニ</sup>如<sup>カニ</sup>左<sup>カニ</sup>  
 鷹極妙云鴨居の鷹をハ拳架に記<sup>カニ</sup>る<sup>カニ</sup>尾<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>  
 前右の<sup>カニ</sup>り<sup>カニ</sup>たる<sup>カニ</sup>と<sup>カニ</sup>云<sup>カニ</sup>なり<sup>カニ</sup>

愚言此画黄鷹<sup>一</sup>也

第三相三段三折



三段三折第三相面して鷲の如く小臂折く力は  
よしハナ段長して背らつて心深くて大捷なり客如死  
鷹鳥極妙云三段三折の鷹と云い胸を破りし勝ハ鴨  
若の如く尾をほよくおと小臂内へ海をぬり良相なり  
愚曰是鶻鷹と画らなり馬術も三段三折と  
云り出たり段の鷹と云も昂て是なり





隼鵟 喙頭大よ平よして青嘴長大なる魚くわゆるい  
 専ら録の如く頭短く胸大よ肩落して廣く甫巨短  
 して大よ毛莫脚短く指長く高羽劔のこくにいて  
 尾短く且り燕の如くあるを良と云  
 愚案た鵟より大小長短よわゆるを悍よして實に  
 全く鷹師の手段にかつよの多し最若き才良を歌と  
 魚くわゆる師心と潜光とんいらる魚と云

惡相或謂醜鷹



醜鷹頭少々々嘴はまり頸短く胸平た南呂短く  
 高羽度くして散短く腰弱く尾直けり且り力あ  
 尾をたみみりて末廣く股尻はし短くして毛莫脚丸長  
 く指ちく爪大く足色赤黄也此相氣醜也弱く小  
 鳥を好む魚一是代惡鷹と云

愚曰此画を撫鷹也今言片毛是あり

鷹極妙曰吉相ハ三長三短也三長ハ小頸散指三短ハ嘴  
 股无毛腔是也又云空形を鷹鳥の體あり大いくあると美  
 と云鳥欄の裏より腕也

愚案多に旧説ハ三短ハ尾爪毛ありハ云と云と云ハ又或

説る三短ハ目の前近く无毛脰短く尾包短くと云と云り  
無名鷹書に云三高ハ頰羽節股此三ツ高々と美くと云  
鷹鳥脰股毛と包脰と云宝形同音之混と云るも蓋一宝  
形高大るる逸物の相也

養鷹鳥飼

劉禹錫

養鷹非玩形所資擊鮮力少年昧其理日日哺  
不息探雛網黃口且暮有餘食寧知下鞫時羽  
重飛不得脛總上林表狡兔自南北飲啄既已  
盈安能勞羽翼

放鷹

白居易

十月鷹出籠草枯雉兔肥下鞫隨指顧百擲無  
一遺鷹翅疾如風鷹爪利如錐本為鳥所設今  
為人所資孰能使了然有術甚易知取其向背  
性制在飢飽時不可使長飽不可使長飢飢則  
力不足飽則背人飛來飢縱搏擊木飽須繫維  
所以爪翅切而人坐收之聖明馭英雄其術亦  
如斯鄙語不可棄吾聞諸獵師

相鷹歌

彦深

論鷹何事最堪奇貪馴居上疾次之曾斬脊方

定快駿目光如電爪如錐若知稟性柔且馴吻  
欲短兮頭欲規兩脚枯鹿枝節踈競道能攫真  
不欺大者頭小小者大喙想欲見羽參差刷翎  
跳身伸脚攀名為弄<sub>レ</sub>架定鷹良趾成十字尾合  
盧彥深著賦為贊揚羽毛要欲善折破坐則尾  
短飛則長倫類亦<sub>有</sub>數般色黑白間見黃赤常人  
言小馴大則悍在山馴者在手翔頭脩紫長善  
回顧雖言能捕終飛揚獵家所訣畧如此餘詳  
大好眼中看羽絕張  
白

鷹賦

隋魏  
彥深

惟茲禽之化育實鐘山之所生資金方之猛氣  
擅火德之炎精何虞者之多端運橫羅以羈束  
綴經絲於雙臉結長繩於兩足飛不遂於本情  
食不充於所欲逸翰由而斲斂雄心為之自局  
若乃貌非不一相乃多途指重十字尾貴合盧  
立如植木望似愁胡鬣同鈎利脚等箭枯亦有  
白如散花赤如點血大文若錦細斑似纈眼類  
明珠毛猶霜雪身重若金爪剛如鐵或復頂平  
似削頭圓如卵臆闊頸長筋鹿脰短翅厚羽勁  
脾寬肉緩此之才用俱為絕伴或如鶉頭或似

鷓首赤精黃足細骨小肘懶而易驚好而難誘  
住不可呼飛不及走若斯之輩不如勿有若夫  
疾食速消此則有命鴛頸猴立是為無病廁門  
忌大結肚惡軟條不欲絕背不宜喘坐於窟者  
則好眠生於木者則常立雙散長者則起遲六  
翻短者則飛急毛衣屢改厥色無常寅生酉就  
枕今號為黃二周為鷓十日為蒼雖曰排盧猜見  
人則馴獲養雛則小病野羅則多巧察之為易  
調之實難格必高迥室必華寬蓋以取熱酒以  
排寒鞫須溫暖肉不陳乾近之令狎靜之使安

晝不離手夜便火宿微加其毛小減其肉肌肥

腸瘦心和性靈念絕雲霄志在馳逐散者勝也格者架也

黃者今之甫羅也鷓者今之求億真也

同前

伊鐘山之鷲鳥稟金方之勁氣含火德之明輝

淪瑤池之純粹春秋運斗樞曰瑤光星散為鷲或聞於蒼成十日或重

其指如十字若乃點血散花之狀艸眸金距之

名西京雜記曰茂陵李奇好馳逐鷲皆為佳名鷲有青翅草眸青宜金距之屬既在南而為鷲晉書曰崔佳清屬較直為尚書

在孟時為之語曰叢生荊棘來自博陵在南為鷲在北為鷲亦與鷲而為兄古樂府曰鷲則虎弟鷲則鷲之兄亦有

下鞫命中畫壁如真漢趙勤字孟卿大守桓虞署以日善吏如良鷲下鞫則中○齊廣寧王存行畫蒼鷲於壁見者皆以為真

資僧達之馳逐

王僧達好鷹犬何尚之曰願即且放鷹犬不復遊獵

殺行父之事君威文仲殺

行父曰誅無禮於其君者如鷹鷂之逐鳥雀

唐則斷聯而見放

太宗初即位園中籠鷹悉斷聯任去

漢則斥賣而不用

和熹太后臨朝上林鷹犬悉斥賣

逐黃犬於東門

李斯臨刑

謂子曰牽黃臂蒼瞪目上蔡東門不可得矣

擊鵬雛於雲夢

楚文正得海青為獵雲夢海青聳翻而升失其所之須臾毛隨若雪血下

如兩有大鳥墮地度其翅其大數里博物志曰大鵬之雛也

梁冀貪而見求

漢馮顛為謁者逐單于至雲中梁冀遣人求鷹止晉陽舍

不避顛命收之其繫鷹而亡

大亮忠而不獻

唐李大亮表官使者求鷹若階下之意深乖昔旨如其擅取任使非人太宗賜金

壺蒙忠謹

馬融既美於出籠

漢馬融與伯世書曰憤愁思猶不解懷思在竹間放狗逐麋脫秋冬大蒼出籠黃棘

下土芘以乾菜自送餘日茲樂未已

要離亦聞於繫殿

戰國策要離將刺辛慶忌蒼鷹繫殿上

同尚父

尚父時唯鷹揚

名傳邳都

漢邳都為濟南時号蒼鷹

魏主以秋吟見

重曹王答繫欽書高風

候文以嚴霜行誅支遁則愛其神

俊

建康實錄支遁好養鷹馬而不乘放人間之曰愛其神俊

亢垣則肆其畋漁

三國典畧垣為翼州好畋漁言寧三日不

食不可一日不獵

至於驚蟄靡失於為鳩處署不差於祭鳥

禮記驚蟄鷹化鳩周書虞署鷹祭鳥

逐不仁者子產

子產曰視民如子見不仁者如鷹鷂之逐鳥雀

名爽鳩

者少皞

少皞為鳥師鳥名爽鳩氏司夜也注鷹也

又若翮短飛急散長起遲大

雌小雄加毛減肥時令既著於學習爾雅亦號

於飛翬亦聞惡彼足黃欲其食疾爵羅設於已

化禮記七月鳩化為鷹然後設網羅

矰戈禁於未繫

漢書鷹隼未繫矰戈不施於蹊隧

飢而為

用猜防既見於曹公

陳登謂呂布曰見曹公言特將軍譬如養虎當飽其肉否則噬人公曰不然譬如養鷹飢則

為用飽則揚去

飽則高颺引諭亦間於權翼

慕容垂請詣鄴符堅許之權翼諫曰垂猶

鷹也飢則附人飽則高颺唯宜急其羈絆不可任其所欲堅不從垂果叛

飼籠鳥卷之十九終

臘月念一日寫

飼籠鳥隼鵬部目錄第二十卷

勝成裕曰雀鷹晨風の類俗に所謂四十八鷹あり其大小形色を以て分別せざるを記し其類に非ざるを食物を見るとき全く鷹鵠の類と事たり是故に鳥鵬の類鳥鵠の類と至るまで載て其屬類と爲と事とすべし

隼經禽

鸛陸機詩疏

賊事物異名

逸羽卓氏藻林

白兔鷹酉陽雜俎

島鳶シマトビ

羗鷲本草綱目

鵠本草綱目

夜鷹黃巖縣志

飼籠鳥隼鵬部目錄終

飼籠鳥卷之二十

隼鵬部八種

隼經禽一名擊征陸機詩疏題肩同上雀鷹同上

和名ハヤフサ

諸州共々海岸の窟中に巢を為さるり其形黃鷹に相同して雀を撃つるも隼多し常に原野に翔る

毛羽希に白く鷹師是を白と云

禽經曰小而鷲者皆曰隼

陸機詩疏曰隼鷲ノ属也齊人謂之擊征或謂之題肩或謂雀鷹

鵠本草綱目

鸛兩雅

麻久曾鷹マクソウタウ

海東鳥大明一統志

魚鷹經禽

鵬本草綱目

虎鷹典籍便覽

鵬漢書

慈鳥經禽

鷓陽春縣志

鷓事物異名

雀鷓本草綱目

白鷓說文

雀鷹本草綱目

鷲本草綱目

鷓本草綱目

鳥シマフクロウ

烏鴉兗州府志



三才圖繪曰隼之擊物過懷胎者輒釋不戮化書曰隼憫胎義也

事物紀原曰隼一名雀雀鷹屬擊物極準

黃縣志曰禿鶯雀鷹能捉小雀

鶻本草綱目一名鶻子同籠脫上

和名

諸鳥共四時棲鳩鳩を擊なり各種サハの一種  
本草綱目曰鶻小於鷓而最猛捷能擊鳩鶻亦  
名鶻子一名籠脫又曰握鳩而自暖乃至旦而  
見釋此皆殺中有仁也此說和俗所謂メクメトリのメ

あり鶻のメハ鶻メトリと為あり鶻メトリ  
て鶻と為と云又五雜組と此説あり

鶻陽春縣志一名花鶻蕭縣志

和名ハイタカ ハニタカ

諸州共よ出る各種コノリの雌あり古歌と降音り  
ゆ赤とんん次と一たうの尾ゆりの鈴の音斗りて  
と云專ら是成用ひりりハニタカと云ハ都て鶻と走  
と云あり鶻のメハニタカと云ハ次

陽春縣志曰鶻音溜小於鷹鶻鳥也搏擊更捷  
於鷹今之獵人爭臂之即所謂鶻隼也此說鶻

より小と云時ハ鷹の雌とあり

鉛山縣志曰爾雅云青質五彩皆備而章曰鷦

寮多に唐の時同州より五色有るを進むと云蓋此鷦の

當塗縣志曰鷦即隼是れ乃隼の類とあるあり

鷦陸機詩疏一名晨風上同

和名ノスリ

諸州より原野より生れ終く巢をたむと云形状都隼の

一類と云大鳥とありと云不帰と云叢の燕雀と追ふあり

孟子曰為叢驅爵者鷦也是れあり

毛詩鳥獸疏曰最風一名鷦似鷦青黄色燕領

鈎喙嚮風揺翅乃因風飛急疾擊鳩鴿燕雀食

之此説甚し當れり嚮風揺翅る試るに真に志あり

梅誕生字彙曰鷦音旃鷦

鷦爾雅一名負雀上同

和名コノリ

諸州共く山林の間にあり是れ乃ハイタカの雄之常に

原野に棲て天鷦を逐く終く捕ら是れあり

爾雅曰鷦負雀也

梅誕生字彙曰鷦音旃旃一名負雀

鷦車物註珠一名鷦鷯上同

和名ノセ

諸州共々山林原野のるよりつづく秋冬の間終く鳥  
雀を撃て食ふ其形状乃黄鷹に似く甚く細小なり  
事物紺珠曰鷓小於隼而捷點一名鷓鷯

鷓事物紺珠 一名

和名エツサイ

諸州共々山野の間に栖む秋月人里に於く雀を捕く  
食ふ其形状黄鷹に相同くして小なり  
事物紺珠曰鷓似鷹而小善捕雀此説是れなり  
字彙曰鷓音嵩

麻久曾鷹一名ジヤウゲニホウ上州方言

諸州共々武州より常州まで多く見ると其形状  
雀よりして小なり原野に飛く雀と遠く見ると其  
雀と遠く見ると其雀と遠く見ると其雀と遠く見ると其

雀鷓本草綱目 一名

和名ツミ

西國の山林に見ると雀鷓より少し小なりて腹の色  
淡く杜鵑の斑點に似く濃く紫に鷹鷂方の小鷓鷯  
の一種小なる者なり小鳥のこゝろ中を飛ぶ鷹家先  
を飼く鳥雀とありてむねも妙なり

本草綱目曰杜鵑條下曰杜鵑南方亦有之状

如雀鷄而色慘黑亦口此說より考ふるに形状毛色頗る相似るなり是の口中ハ鷹の如くハ杜鵑の如く赤

逸羽卓氏藻林一名

和名宝形鷹極

九州の地方に希に見るなり形状白鷹と相似る小なるものと毛色種々あり鷹家御野鴨白鷺と捕らるるに鷹極妙の宝形と云ふ美稱あり又股毛を包脛と云宝形と音相通を此宝形の相全く此逸羽と傳るなり

卓氏藻林曰逸羽疾飛之鳥也

海東鳥大明一統志一名青鵬本草綱目海東青異名

和名サマハ

北海より渡来する鷄より小なり其形隼に相似る鷹家大に貴るる貝原翁の所謂鷹鷄方の小鷄鷄也と云大明一統志曰海青鳥小而捷能擒天鷲也異名記曰登州海岸有鳥如鷗名海東青擊物最健本邦より渡来する此登州より来ると云

本草綱目曰時珍曰青鵬出遼東最俊者謂之海東青

白鷺文說一名揚白爾雅王鷗文說白尾鷗南海縣志鷹廣韻揚古今注  
和名ヲニロ

真州の山中に渡来す他あり未だ見ざるなり其形状  
魚鷹に相似して少く大なる尾の端白く鳥雀を逐ふ  
てあり余亦此種鷹と魚鷹の間なるものなり

説文曰白鷹王鷲也青鵞也並東萊對音詰之

廣韻曰鷹一名揚鳥善捕鼠

爾雅釋鳥曰揚鳥白鷹注似鷹尾上白

古今注曰揚白鷹也似鷹尾上白

南海縣志曰白尾鷄此鳥尾上白一飛時能見の

白兔鷹酉陽雜俎

和名ニキニロ

此種北方より希く来りて

酉陽雜俎曰齊王高洋天保三年獲白兔鷹一  
聯毛羽如雪目色紫凡之本白向末為淺鳥之  
色蠟脰並黃當時號為金脚高齊武平初領軍  
將軍趙野又獻白色鷹

魚鷹經禽一名鷲上同王雎上同雎鳩周詩鷓鴣雜詩沸波淮南子

海鷗南產丁密鳥綱目魚鷁當塗縣志食魚鷹本草綱目

和名ニサコ シニヤコ ヒサグ 江州方言 ウヲタカ ウラタカ ビニヤク 薩州方言

諸州共之海濱之棲む者大々鳩の如く尤も大々形色  
全く鷹に相似く尾短く白毛有りて飛ぶ時白く其  
聲も亦く鷹及鴟に近く常に水上に集りて魚の躍  
を見し撃つる岸上之集りて飛ぶ者頗る鷹と鷹中  
に貯るは是れ之が鵞と云人往く得く珍重を其  
味亦く人への勝るを云本朝食道より鵞魚  
を捕りて石窟中に置りて以て鵞と云雨雪風浪魚を捕  
るは是れ時宜し入るは是れ食ふなりと云此説也  
之否未詳とせ次

本草綱目曰時珍曰鵞狀可愕故謂之鵞其見  
睢健故謂之睢能入穴取食故謂之下窟鳥翔  
翔水上扇魚令出故曰沸波禽經云王睢魚鷹  
也尾上白者名白鷹又曰鵞鵞類也似鷹而土  
黃色深目好峙雄雌相得鵞而有別交則雙翔  
別則異處能翱翔水上捕魚食江表人呼為食  
魚鷹亦啖蛇詩云關之睢鳩在河之洲即此其  
肉腥惡不可食陸機以為鷲揚雄以為白鷹黃  
氏以為杜鵑皆誤矣禽經云鳩生三子一為鵞  
鳩尸鳩也杜預以王睢為鵞鳩或以此也  
閩書南產志曰海鵞方言魚鷹也蒼色似鵞擢

魚食之

當塗縣志曰俗呼魚鷁

事物紺珠曰魚鷁似鵠鷁而大紺色此說也肥後

の山河に産翡翠あり其形状翡翠の下に詳あり又

楊雄魚鷁を以て白鷁と名する誤りあり其形色相似り

に因て之通雅に白鷁と白鷁と作らるり

雀鷁本草綱目一名鷁詩經焉通雅隼詩經鷁爾雅鷁詩疏鷁本草別錄

茅鷁爾雅老鷁本草綱目負雀爾雅鷁盛京通志擊正本草綱目題肩同上

阿參耶梵書

和名トビ トニビ

諸州昔より有り志うれも江戸のとき記多しハルハ次ニ肥

前の長崎も亦多し其形状黃鷁に似て總身褐色

緑黒の斑点相間四月に樹上の葉と為り

本草綱目曰時珍曰鷁即似鷹而稍小其尾如

舵極善翔專捉雜雀

詩曰鷁飛戾天又鷁鳴則風生則塵埃起

曲禮曰前有塵埃則載鳴鷁

含山縣志曰鷁鷁鳥也似鷁鷁飛戾天

島鷁 一名大鷁肥前野茂

肥前の長崎より十二里より南野茂と云所あり此所の

海濱より多し他州の海邊にも亦希に赤きものあり其形色  
全きふして大し頭より背の上灰黒ふして胸前の斑も  
大なり一體の容貌たぐはし常し海濱より赤く魚を食ふ  
是の所の土人大鷹と云ふ此海陸の遊行して親く此鳥  
を見たり老して灰黒の斑紋ありたれは自ら是れ一種なり

鵬 本草綱目

一名兔鷹 黄縣志

姑栗陀

事物紀原

和名クマタカ

真羽の深山より希に赤き其種も亦し大小あり其尾色一  
ちり次老して黒きあり若しは斑ありあり老して  
黒くても大なる物をハチツマと云ふ又大口ありて斑あり

小ちをニタリと云ぬる者たに似るを云ふし和漢書に此翅を  
矢に刺てりしと云是を名て真羽と云真州金津の人より  
来りし狐鬼を逐せて擢しむ予久く此地よりよく親しく見  
るに冬月雪中に使ふ其法亦も秘術なり常し是或狐  
よ犬肉猫肉及雞胤の類を食ふ夏月狗の聲にむくは  
牛馬の肉を食ふ甚し悪名のおあり 飢を耐ふ小兒をりて  
擢ると云ふあり

本草綱目曰鵬似鷹而大尾長翅短上黄色鷲  
悍多盤旋空中無細不覩此说甚し明白なり山中  
して空を舞りし狐鬼の叢中に伏したるを見く撃つ人の



見(る)る変(じ)と見(る)る其(の)物(を)取(り)ぬ(れ)も妙(な)あり其(の)故(に)無(細)  
不(靚)と云(ふ)

鷲本草綱目 一名皂鷲同上 大鷲景字

和名ヲ、トリ クロリ津輕

近時希(ま)東都(に)渡(り)来(る)其(の)多(く)此(の)種(あり)真(の)鷲(を)飛(に)  
鷲(の)一(種)小(る)物(なり)

梅(誕生)字(彙)曰(く)鷲(音)袖(大)鷲(也)黒(色)多(子)此(れ)  
大(鷲)と云(ふ)其(の)大(る)り真(の)鷲(を)飛(に)非(を)鷲(の)大(る)り其(の)  
本(草)綱(目)曰(く)時(珍)曰(く)即(く)鷲(也)出(北)地(色)黒(皂)鷲(也)  
ありと云(ふ)

深州志曰(く)翎(中)箭(羽)是(れ)乃(チ)矢(の)羽(に)作(ら)る(り)

羗鷲本草綱目 一名亞既刺職方外紀

和名ハチクマ

滿州より蝦夷(の)地(方)へ渡(り)来(る)と云(ふ)乃(チ)羗(地)の産(る)故(に)  
羗(鷲)と名(く)其(の)形(状)鷲(に)類(し)て尤(も)大(る)り日本(に)  
ハチクマと名(を)使(ふ)る(り)得(む)

本草綱目曰(く)羗(鷲)出(西南)夷(黃)頭(赤)目(五)色(皆)  
備(此)後(を)見(れ)い(西南)より出(る)と見(る)る

西域記曰(く)皂(鷲)一(産)三(卵)者(内)有(一)卵(化)犬(無)  
異(但)尾(背)有(羽)毛(數)莖(耳)謂(之)鷹(背)狗(案)る(り)

鷹狗の事小一ノ只云説を考ニ記したるなり真ノ物

ニ化スとも云信ノ如ク一ノ如ク一ノ如ク一ノ如ク

西域記曰耆就閣崑山有兩峰雙立鷲鳥常居

其嶺山遠望如鷲形故名靈就山

職方外記曰利未亞有鳥名亞既刺乃百鳥之

王也羽毛黃黑色高二三尺首有冠鈎喙如鷹

隼飛極高巢于峻山石穴内王子則令視曰目

不瞬者乃留之可最長久者脫去羽毛復生新

羽與雛不異性鷲猛能擢羊鹿百鳥食之肉經

宿則不食矣百冒險者尋得其巢取其餘肉可

供終歲有毒蛇能害其好則知先尋一種石置

巢邊蛇毒遂解其性有知覺受人德亦必報焉

西國大王恒用此鳥像為號是説乃ナワニなり其一

種石と云ハ礬石及雄黃の類なり坤輿外記の説も亦

相同一西域の雀の乍に皆鷲の雙頭と画せり又魯西

亞の船の旌亦も此雙頭と画せり

虎鷹典藉 便覽一名骨虫西域聞 見録

和名イヌワシ前 松

北地ハ希ニ来リて豺狼を撃ツ昔ハ人を取ク空中に  
行リ行リ又馬を撃ツ行リ行リ鷲の尤も大なるものなり是れ

乃朝鮮より来る大ワシ

本草綱目曰時珍曰又有虎鷹翼廣文餘能搏  
虎也如虎猛多をづく其國王下と云

范涑典籍便覽曰虎鷹能飛捕虎豹身大如牛  
翼廣二丈凡百鳥の王と云

西域聞見録曰骨含鵬之黒而大者高二三尺  
不等翎健多力回地深山中所生惟巴達克益

西黑鵬尤大而猛驚飛則兩翼垂雲宿山嶺高  
如駝象所過之處人皆避屋中往々攫去牛馬

翅翎墜地長輒八九尺或丈餘西洋の人皆是を貴重

鷓鴣本草綱目一名翟爾雅木兔郭璞禍鳥深州志掘穿鳥吳氏食物本草

猫頭鷹本經逢源大頭鷹本草附方

知名木兔日本紀ミミヅク

諸州共々多し夜鳴て甚し惡聲の鳥あり其形狀鷹

に似て頭より面色總て猫の如し其目の色鷹眼の如し

夜明かして白日に更し物を見たりと得て人性と雖も

畜て玩弄し鼠及小鳥を攫て食むる乃鷹の如し夜死て

曉よきて雀を逐ひある冬夏常に山林の間に注ぎ人其

物ありあられ不祥の鳥あり白日人家に入り付し不祥と

と云是れ乃陰鳥あり故なり

爾雅曰藿老鵠郭璞邢昺曰木兔也

本草綱目曰時珍曰此物有二種鵠鵠大如鵠

鷹黃黑斑色頭目如猫有毛角兩耳晝休夜出

鳴則雌雄相喚其聲如老人初若呼後若災所

至多不祥又曰白日不見人夜能拾蚤蠱此說の

如く頭上よ毛角乃チ兩耳あり此形を以てミツクの名を

得たり其耳のまはるる形頗る兔の耳の如く是の故に木兔

の名あり乃チ本はほむ兔と云えり日本紀にも此名は唐土より

傳て人なるものあり和補の記に云く今所謂漢名を以て

日本紀に記し云くと云る處

深州志曰鵠鵠晝伏夜飛俗謂禍鳥也此說の如く

鵠本草綱目一名鴛說文鵠孟木兔爾雅注鵠萬畢術老兔草氏

訓狐李氏本草猫鷹海南縣志鵠陽春縣志隻狐彙猫兒頭黃縣志車載板李氏本草

快扛鳥同上春哥兒同上夜猫兒武備志

和名ツク コノハツク

諸州共々山林の間に花竹をそとす鵠の如く其形状も亦

鵠鵠に相同し只毛色甚く黒く鵠鵠の如く斑毛あり芋人

是或樹下に坐す時其衆鳥皆来りて玩弄して集り是或粘

て捕らる是或木兔ツクヒキと云

淮南子萬畢術曰鵠鵠能致鳥言取鵠鵠折其

大羽絆兩足以為媒張羅其傍鳥自聚是れ乃木  
鬼延り唐土よりも上代より是れ為る日本よりも此等の説  
より此媒と為ると見へたり

卓氏藻林曰老鷓木兔也似鷓鴣而小夜飛食  
雞鷓音兔此説鷓鴣より小と云乃コツクなり是れ木兔と  
為ると見へたり

孟典曰鷓木鷓鳥有毛角夜飛好食雞  
爾雅注曰又木兔似鷓鴣而小此説是れコツクなり  
字彙曰其鳴即兩為圖ツクキ可以聚諸鳥一名隻狐

晝無所見夜即飛噉蚊此説此噉を噉と云ハ目眼の

能くぞと云のこ常に蚊蟲を噉くを云ふに可なり

本草綱目曰訓狐聲呼其名兩目如猫兒大如  
鷓鴣作笑聲當有人死又曰又有鷓鴣亦是其  
類微小而黃又曰一種鷓鴣大如鷓鴣毛色如  
鷓頭目亦如猫鳴則後竅應之其聲連轉如云  
休留故名曰鷓鴣江東呼為車載板楚人呼為  
快扛鳥蜀人呼為春哥兒皆言其鳴主有人死  
説文謂之鷓音爵言其小也是れ此説と云ふに可  
鷓鴣の一種小なる者ありと云ふコツクなり疑ふ  
黃縣志曰鳥俗名猫兒頭夜叫晝則目不見猫兒

頭ハ本兒フカウ鳥ハ鵲フカウ多ク相似フカウ故ハ二物相混フカウなる見フカウ也  
南海縣志曰猫鷹フカウ此フカウ説フカウ乎似フカウ乎フカウ以フカウて名フカウとフカウなるフカウ  
陽春縣志曰一種大如鳩頭目赤似貓即鵲フカウ  
也擢而鳥雜所至之處群鳥噪而逐之土人因  
之取為鳥囚フカウ此フカウ説フカウ是フカウれ所フカウ謂フカウヅフカウクフカウビフカウキフカウるフカウ  
當塗縣志曰鵲即鵲フカウ鵲フカウ有大小二種フカウ此フカウ説フカウハフカウ鵲フカウ也  
鵲フカウ鵲フカウ相混フカウ也

鵲漢書一名鵲陸機詩疏梟文説梟本草綱目鵲梟上鵲梟梟事物異名

土梟兩雅山鵲晉灼鷄鵲十六國史怪鳥禽經禍鳥事物異名福鳥山堂肆考

畫鳥事物異名蟬山堂肆考鷓事物異名鷓事物異名訓狐本草拾遺訓候典藉便覽

孤猿八閩通志流離經詩流栗事物異名魍魎韻書逐魂吳球方

掛首事物異名啞十二事珠古日八閩通志夜遊女本平廣紀

和名カホヨドリ歌子ヨドリ東國フリツク讚州フリツク阿州フリコロ古訓

諸州共ニ山林ノ多クシ徑ニテテ形状却シ本兒ト似ク  
耳不レレ緑色ハシテテ美味ハシ次第鬚毛共ニ有ル鳥ノ屬ナリ  
夏月ニテ雛ヲ食シテテ飼ハシテ押スル者アリ飼法本兒ト似ク  
荊州記曰巫縣有鳥如雌雞其名為鵲楚人謂  
之鵲古ノノ鳥ノ字ヲ用フル者ハシ知ル鵲ノ字ヲ用フル者  
ハシ又鵲ノ字モ亦用フル者ハシ本朝食滷ニ梟ト  
鵲ト鵲訓狐一物ナリト知レル者ハシ世人未ク細ニ辨ズル者

かゝ古人又性鷓鴣と相混を能く詳に分別して其  
是非を云ふ也

陸機詩疏曰流離梟也自關而西謂梟為流離  
其子適長大還食其母故張奐云鷓鴣食母許  
慎云梟不孝鳥是也

本草綱目曰時珍曰鷓鴣其色如服色也鷓鴣與鴉  
二物也後人遂以鷓鴣為一物誤矣此鷓鴣ハ口  
ヅク小一陽春縣志の一種如鷓鴣と云に同

嶺表錄異曰北方梟鳴人以為怪共惡之南中  
晝夜飛鳴與烏鷓無異桂林人羅取生鬻之家  
家養使捕鼠以為勝狸

又曰鴉大如鷓惡聲飛入人家不祥其肉美堪  
為炙故莊子云見彈求鴉炙說文集不孝鳥食  
母而後能飛漢書曰五月五日作梟羹以賜百  
官以其惡鳥故以五日食之古者重鴉炙及梟  
羹蓋欲滅其族類也此後依う所ハ鴉と梟と二物也  
と雖も實一物なり古書の説此類者有り

鳴梟 ミマフク 一名ミロフク

蝦夷の地あり其形狀鷓鴣に似て大に總身黃白  
紫黒の斑點有り甚に美彩有り揚子の箭より貴

重を未だ是紙細ふ者か予も亦く蠟夾より此尾羽を  
得て珍藏を群禽の中に於て最も珍しと云

夜鷹 黄巖 一名夜胡上 鬼東郭上

和名 ヌエツグ ヨシカ

諸州共々深山茂林の中に夜鳴て飛行を絶く宿鳥を有  
るを人々或呼ヌエツグ鶴鶉ヌエツグと令て白日希く見らるる所なり  
大サ鶉ツグより大よしそ形状、鶉に似く煤色尾短く目丸も  
大よ亦く猫見の如く足甚よして前後より二指を分り是れ  
乃チ陰鳥なり 飼法雀園を喚ぶ新鳥アラトリの田螺を擣破て飼  
るカしるれも雀園に於ては久く活日あり

黄巖縣志曰夜鷹俗呼夜胡一名鬼東郭此説  
是れ夜鷹なり和漢共々自今名を更にお目此等ハ  
亦に令名を屬する所故なり此鳥夜鳴鳴を々聲怪々  
宿鳥の類は此茂林の中を人々呼りて人々く是れを  
喚ぶ人我と呼るを呼らるる所なり和歌三鳥の傳ハ  
喚子鳥なり人々或は之を呼る或は猿と云或は鹿と云或ハ  
諸鳥の聲を括して云とあり又葉集ハ大伴坂上郎女の歌ハ  
世の帯に聞はるるハ喚子鳥聲なりハにありぬ又万葉  
集の鏡王の女ハ歌ハ詔をしの岩殿の木の喚子鳥を呼りて  
我ハハまらる又葉集に此他後撰集の歌等も亦々乃チ此



見れ、今、茂林の中の鳥の啼聲と續るに似たり

慈鳥禽經 一名鳥九州志 孝鳥文說 玄鳥古今注與燕同名 吉鳥典籍便覽

鳥侍事物紀原 陽精同上 寒鴉本草綱目 慈鴉漳州府志

哺公鳥曲籍便覽 鳥中曾參事物紀原 名露乙加个本草

和名カラス サトカラス ハシボリ

諸州共々多し山野市中と雖もあまをなす凡諸鳥の中  
にて悪念を為さぬ者あり四五月に大樹の上へ雛を卵前  
の大村の邊へ農人数十人たつ竹竿を持て雛を破り  
たぐり雛を縄にて縛り小兒群して玩弄を諸方より集り共  
鳴て噪し一村に村人取去る此故に他州より至り大

是代ありされいふ農の害を為すといふ悪鳥ありといふ  
一種白点ありあり予先年房州の海岸へ見たりあり  
常の慈鳥に比されいふ大なり是れ老して大なるに似たり  
一種灰白ありあり先年水府へ見たり是れ老して深黒あり  
さうありあり

一種赤色ありあり先年水府の北郷へありたり者り予未  
き由を詳しせざしれども雛ありと云雛ありは鋭と云時何の  
色に愛ありや極てありあり

本草綱目曰時珍曰鳥字篆文象形鴉亦作鷓  
禽經鷓鳴啞故謂之鷓此鳥初生母哺六十

日長則反哺六十日可謂慈孝矣北人謂之寒鴉  
鴉冬月尤甚也禹錫曰慈鳥北上極多似鳥鴉  
而小多羣飛作鴉鴉聲不羶臭可食禹錫說不  
羶臭と云ハ非なり世人冬月取て藥として食く或は燒  
て藥に入用たり知りて云時珍曰小而純黒小鶯反  
哺者慈鳥也此説是れハ之ホリなり本草に臘月以瓦  
瓶泥固燒存性為末每飲服一錢又治小兒癩  
疾及鬼魅と云此説より皆是或は惡毒と云をたり  
漳州府志曰通志曰又一種似鳥シト而小群飛作  
鴉聲者曰慈鴉今謂之寒鴉

杭州府志曰又一種名寒鴉此比常鴉頗小歲  
十月自西北來其陳蔽天案に杭州ハ南方少く  
大鶯の之常に多し此故に大鶯を常鴉と云寒鴉ハ臘月  
至て西北より來ると見たり日本の如し大抵寒鴉之是或  
常鴉と云魚之風の志よりむす此説を云る魚之是或  
物品の常のりるもの此お遠り

鉛山縣志曰純黒而反哺者曰慈鳥每鳴作鴉  
鷓聲

房山縣志曰鳥孝鳥也反哺曰慈鳥不反哺曰  
鴉今日本の常鴉ハ鳥なり鷓なり又鴉ハ鷓の字同

又案古より及哺の説は雛成長して親より大なる  
あると雖も哺て食を與人を大なるを見く親に食を及哺と  
云親より及哺雛より親より大なる故に古今此及哺の説  
は四月に是を試く自ら明白なり

烏鴉亮州府志一名鴉上同老鴉兩雅鴉鳥小爾雅楚鳥詩義里鳥事物異名

大鶩經禽大鶩鳥上同大鶩鴉陽春縣志巨喙鳥經禽

克里草事物異名鸞鴨兩雅注秃列老温事物異名

番名

和名ハミフトカラス ヤマカラス

諸州昔より多し海濱の群飛を尾州の地は尤も大抵此

鳥鴉あり其形状慈鳥に似く鶩也も大なる故に大鶩の  
はく閑を東をよかき聲も大なる多し南山本草得説  
よ山中より多し市中より多し来りて慈鳥より大く  
鶩也も肥大なり食を食て扱て食ると云

本草綱目曰時珍曰烏鴉大鶩而性貪鷲好鳥  
善避繒繳古有鴉經以占吉凶然北人喜鴉惡  
鵲南人喜鵲惡鴉惟師曠以白項者為不祥近  
之

小爾雅曰不反哺者謂之鴉鳥  
杭州府志曰純黑反哺曰烏不反哺曰鴉

陽春縣志曰鴉鳥鴉色黑亦有白頂者俗名老鴉亦名大鶯鴉

沂州志曰頭白不反哺曰鴉此一說也  
頂頭白と云時ハ大鶯の老して頂上の白と老鴉と云ふれ  
常に大鶯多し其の中に老して頂白も有り  
是故に古より老鴉の稱多し諸鳥皆老鳥といへども  
見て見へるは只此鳥鴉の頂上白して老へたる貌  
なり又鶯の中にも老へたる貌あり見ゆるなり是れ由て  
老鴉老鶯の名多し見へたる見へ易と云ふ人皆老鶯と  
稱するなり

猗骨執育 環海記聞

蝦夷の北に島あり獵虎島と云此邊より數百里西北の  
諸島に多く産む其形状鳥鴉に似て總身深黒あり常  
に其卵を生む島人取て食む雜鴨の卵のと云此島の皮  
とあり毛羽のや綴合を島人衣服と云此鶯ハ紅色可  
黄を帯く其見ゆるあり婦女ハ此鶯を衣敷の上へ綴り垂  
て衣上の飾と云此鶯を蝦夷言て「エトヒルカ」と云「エト」ハ赤  
色あり「ヒルカ」ハ鼻あり島人此島を猗骨執育と呼ぶ何の  
義なるやと知る者や往年仙臺の飄流人此鶯紙  
持来るあり委し環海記聞に云えり其島の圖の如し

邊要分界圖考曰エトヒリカ鳥此鳥東ハエトヒリカ  
島より奥島と西ハカラフトノ地奥より大サ鴨の如  
羽黒く嘴紅くして美多リ故名く「エトヒリカ」  
美の夷言なり



飼籠鳥卷之二十終 大尾

壬辰孟陬念七日寫畢  
真臺師藏

